

二 利潤なき社會に於ける蠶絲經營

農學博士 早川直瀨

- | | | | |
|----|------------------|----|-------------------|
| 一 | 緒言 | 一七 | 製絲經營の集中と分散 |
| 二 | 目的の社會と手段の社會 | 一八 | 製絲企業の變遷 |
| 三 | 手段の發達 | 一九 | 製絲工業と原料との關係 |
| 四 | 技術の進歩 | 二〇 | 蠶絲業界に於ける階級闘争 |
| 五 | 産業革命 | 二一 | 原料所有者の價值擁護運動 |
| 六 | 自由放任の經濟學說 | 二二 | 組合製絲 |
| 七 | 資本主義經濟組織 | 二三 | 地方是製絲 |
| 八 | 新機械の發明と「パベル」の塔 | 二四 | 労働者の利益分配と養蠶家の特別配當 |
| 九 | 資本増殖の原理 | 二五 | 經營の分化と企業の一 |
| 一〇 | 資本主義經濟の行詰 | 二六 | 國外に輸出するとき利潤を得べし |
| 一一 | 日本の資本主義經濟組織と其の發展 | 二七 | 蠶絲業企業權の合同と民衆化 |
| 一二 | 手縫の足袋から福助足袋へ | 二八 | 各人の全面的活動と理想の天地 |
| 一三 | 日本の織維工業 | 二九 | 方七十里なれども大ならざる文王の囿 |
| 一四 | 織維工業としての製絲 | | |
| 一五 | 蠶絲業の前途洋々たり | | |
| 一六 | 蠶絲業經營の進化 | 三〇 | 來るべき蠶絲業の經營 |

病床から演壇に抜け出して参りました。日頃醜化した生活をやつて居ります私共には、病床に横たはることもさる方に慰めが多いことのやうに思ひます。

病床に横はり乍らつく／＼考へるのに、若し是が家でなくつて下宿に寝て居つたのならばどうであらうか、自宅だから何の心配もなく居られるが、下宿でも程度の差こそあれ能くやつて呉れるだらう、何故ならば、私は制度の下にと言はふか、契約の下にと云はふか、兎に角一日や二日病臥して居つても、収入がある人間だ、「下宿料を拂つて呉れるだらう」と下宿屋は考へるから親切にやつて呉れるだらう。

然し若し是が随分永い間働いたが老朽して働くことが出来ない孤獨の人間だとする、斯る人が病氣をしても、誰も構つて呉れなければ、下宿に入れて呉れと言つた所が、どここの下宿で果して入れて呉れるだらう。

此處に又孤幼児がある、將來如何に大きな働きをするか理解らないが、其孤兒を喜んで哺育する家があるだらうか、彼等に目下何も収入もない時に之を喜んで入れて呉れるかどうかといふと、社會でも彼を傷いた敗殘者や孤幼兒を抱擁しては呉れない。

何故だらうか、下宿は營業だ、其目的は營利だ、下宿業は企業だ、社會は如何なる社會かと云ふに此の社會は企業中心で利潤を追求して居る資本主義の社會である、だからまだ生存權の確立と云ふことは出来ない。もつと重要な勞働權と云ふことも、保證されて居るかと言ふに、身體が完

全だ病氣は持つて居ない、努めて講壇に立つ人間とは違ふ。斯かる健康者で働きたいと思ふけれども働くことが出来ない様の制度に現今はなつてゐる。然らば果して何が故に、斯う云ふ世の中が出来て来たのかと云ふに、これは資本主義の世の中となつたからであると云はねばなりません。

斯く私が申すと云ふと、お前は社會主義者ぢやないか、此講演會は澤山の人を集めて、ひどい宣傳をやるのではないかと言はれるかも知れませんが、さうではない、資本主義には良い所もある、此良い所も悪い所も申して、そして私の論題である所の「利潤なき社會に於ける蠶絲經營」を持つて行きたいのであります。

大體私共の住む天地が二つあるやうに思ふが此二つは究極する所一つである、目的の天地、即ち是であるのであります、此目的の社會に達せんが爲には、そこに必ず通つて行かなければならぬ手段の社會と云ふものがある、即ち手段が發達し、進化して行く上に於て、私共は動もすれば、手段に勝はれて仕舞ひ、そして目的から遠ざかつて来る様になるのである、此處に私共の凡ての病弊が起つたやうに思ふのであります。

先づ考へて見ませう、手段である一の制度にも、それ自體の目的があります、然し其目的が違はらるゝに従つて、其制度の動きが悪くなり、其組織は活動が鈍つて参ります、而して其究極した處は、即ち其制度は所期の目的を達したのだから、新らしき制度、新らしき組織に席を譲つて仕舞は

なければならぬのであります。

今私共の住む社會は、斯くも物質的進歩に加ふるに、人文的發達を來し、將に文化爛然として發達するに至りましたが、此處まで持ち來した制度、それを若し、人ありて之れを荷ひ來つたりとすれば、足元もよろ／＼で、新らしき力を持つ人に、之を譲らなければならぬ程になつて居る、然らずんば此制度では進んで行くことは出來ないのであります。

一體私共は私共の生活の目的を達せんが爲の手段方法を、段々と改善して參りました、抑も吾人々類の生活の始めに於ては、人一人の活動で、一人の生活を支ふるか、或は數人の自分の家族を生かす事よりほか出來ませんでした、之即ち家族的の自給自足の經濟と申すことであります。けれども、人間には不斷の要求あり、慾望があるから、段々と其域に満足することは出來なくなつて來る、斯くなると、順次に今度はより以上の手段方法を發明して、之に依つて、一人の人の慾望が、多くの物を獲得するやうに爲し度いと云ふことになるので、自分ちや出來ない、他の人からも作つて貰つて、多くの人の恵みに依つて、自分の慾望の満足が出来る様な社會を作り初めます、斯くて先づ初期の流通經濟の組織が此處に開かれるのであります。

斯くして流通經濟の組織が開け初めますと、技術上の進歩と云ふことが段々促されて參りますが、外國で申しますれば、永いこと基督教の制度とか、教義とか、社會の制度と云ふやうなものに押付けられて居ましたから、そこから抜け出して、發達することは困難でしたが、順次に新らし

き機運が加はつて参りますると、茲に技術上の發達が出て來ました。

是は歐羅巴で申しましたならば即ち吾人の人口に膾炙して居ります産業革命アーノルド・トインビー〔Arnold Toynbee〕と云ふ經濟學者が創試した所の所謂産業革命と申すことが是であります、即ち十八世紀の後半から十九世紀の前半にかけて、一番初めに英吉利がもとなつて、總ての組織が技術的進歩發達の爲に、根本的に覆されたやうに發達して來たことを言ふのであります。先づ此産業革命は如何なる方面から、如何にして發達して來たかと言ふことを申しませう、今日文明の兩親と申しますれば鐵と石炭でありませう、此鐵と石炭とが容易に掘られるやうになつて來たことが現代の文明を持ち來すに大なる力があつたことは申す迄ありません。

其鐵と石炭とを掘るのに、昔は極く原始的な掘り方でありましたが爲に石炭が澤山あり乍ら、排水方法がうまく行かなかつたが爲に採れない有様でありました、鐵も同様である、所が初めて蒸氣機關が千七百八十六年に、鑛山に用ゐられるやうになつたのであります。

蒸氣機關は申すまでもなく「ワット」が改良を加へた物であります、殆ど使用的價値はないやうな物を、本當によく使へるやうに「ワット」が改良を加へたものであります、茲に於て坑内にあつて排水し乍ら炭が掘れ鐵がとれることゝなり、其鐵、其石炭を組合せて、機械を作ることになりました、之に便宜を得まして、それから世の中が覆りかへるやうな進歩が行はれ始まつたのであります。

先づ一番初めにそれを利用しましたのは、どの方面かと申しますると、是は後にも申しますが、消費の資料を作るのが斯る場合に一番初めに發達する順序であります、即ち纖維工業に於て用ひられました、人間の衣食住と申すが、着る物は人間に對して密接な關係がある、此着る物を作るに對して、色々の技術的發明が行はれたのであります。

蒸氣機關が鑛山に用ひられしより約二十年前、一千七百六十四年に「ハーグリーブス」[Hargreaves, James]が「ジエニー」(Jenny)と云ふ紡績機械を發明しました、日本では公共の子供の時代迄も、之が使用を見て居つた絲紡車、お婆さんが日和ぼつこをし乍ら、縁側で猫と相談して絲を作つたのは、一度に一本しか紡げませんでした、此「ジエニー」紡績機では、一回に十一本の絲が紡げると云ふので、「ハーグリーブス」は非常に喜びまして、最愛の妻の名「ジエニー」をとつて、同機に名付けたのであります、爾後「ジエニー」機は段々と改良が出來て、「ハーグリーブス」の存生中に一回に十一本迄紡げる様になつたのであります、してみれば紡績生産が一本一人力から、十一一人力になつた理であります、斯くて十二人力十三人力十五人力と云ふ風に、紡績生産力が段々殖えて行つたのであります。即ち人一人の働きが人一人の爲でなくて、五人六人十人百人と云ふ具合に段々と生産が擴張して參りました。

次いで「アークライト」[Arkwright, Richard]と云ふ人になつて、水車を使用する所の、更に大型の紡績機即ち水車紡機(Water Frame)となり、紡績業が工場制工業になる端緒を開く様になつたのであり

ます。

爾來改良發明が頻に行はれて「クロンプトン」(Crompton, Samuel)に依つて千七百七十五年以前兩機の長を採つて、折衷紡機である所の「ミュール」(Mule)が發明せられ、水力或は畜力を以て運轉せらるゝに至つたのであります。「ミュール」とは騾、即ち馬と驢馬との混血種と云ふ事、此機械は兩者の良い所を採つて作つたと云ふのを謙遜して表はして居るのであります。現在用ゐて居るのは、是を改良した物であります。斯う云ふ風に紡績の手段も段々と改良せられましたから、家族經濟内でお婆さんがぶんぐと紡いで居つた方法が使はれない様になり、之に換ふるに、進歩した機械が順次に使はれ、之を使用する新しい經濟組織が出来る様になつて参りました。

尙ほ之を織物の方面から申しましても「ロバート・ケー」(Kay, Robert)に依つて、梭箱装置が發明せられ、「エドマンド・カートライト」(Crompton, Edmund)に依つて、千七百八十七年に力織機が發明せられ、織物の方面に於ても著しき、技術的進歩、即ち生産手段の改良が行はれ、斯くて益々人間の手段が増進して行つたのであります。

尙織物業と密接の關係を持つて居る晒練漂泊方法を觀るに、之に於ても著しき進歩發達の跡を見るのであります。即ち昔は酸敗した牛乳の中に浸けて、一月も二月もかゝつて漂泊したのが、漸く硫酸を用ふる様になり、更に千七百七十四年に「シェーレー」(Schöeller)に依つて、鹽素が發見せられ、爾後「バートル」(Berthel)に依つて、木綿漂泊に之が應用せらるゝに至り、著しく斯業が發達し

たのであまります。

斯くて織維工業に於ける生産手段は著しく改良進歩するに至りました、而して如斯き進歩は、化學工業に於ても、製鐵工業に於ても、各種の方面で行はれたのであります。

然らば如斯き手段の増進したのは、果して何の爲であるかと云ふと、我々に不斷の慾求がある、要望がある、醜を得て蜀を望むと云ふか、飽く事を知らざる所の慾望があるからであります、此飽く事を知らざる慾望が、吾人々類を向上より向上に、進歩より進歩に導いたのであります、斯くして手段の總ての改良が企圖せられ、斯くして手段の進歩發達が行はれ、斯くして世の中、舉つて之を喜ぶに至つたのであります。

當時は機械の改良發明をすると、理髮屋の主人であつても、田舎牧師であつても、「サー」と云ふ榮爵が貰へたり、此發明に依つて巨萬の富が貯へらるゝ様の結果を來したから、大天才に率ゐられて、小天才が輩出し、各種の方面で手段の改良發達が行はるゝに至つたのであります。

斯くして理化學的、機械學的の改良發明は、其當時から著しき勢で進んで参りました、今日も尙絶えざる進歩の大勢の中にあります。然しながら、是等は詰り手段の社會進歩であり、吾人々類の目的の社會の完成を來らすか否かは、他に依つて之を觀なければならず、創造しなければなりません、之等手段の發達は吾人の慾求に添はんが爲に出來て來たのであります。

而して如斯き技術の進歩を率ゐんが爲に、經濟組織も亦變化して來ました、何となれば、手段即

ち技術は、何處迄も技術であつて、之に主たるは即ち經濟であるからであります。

産業革命を率ゐ、更に之を發達せしめんが爲に生れて來た經濟思潮は、自由放任の經濟學說であり、其組織は之より生れた資本主義經濟組織であります、即ち此間の消息は、極く容易に想像せらるゝ處であります。

即ち資本を有する者は之に依つて優良なる生産手段たる機械を購ひ、之を以て最新方法を以て生産をなし得る、即ち資本を持つて居る者は、良い機械を買へる、良い機械を買へると云ふと、優良なる商品を廉價に生産し得る所で、斯る生産品こそ、「マルクス」(Marx, Karl)が共產黨宣言で、「低廉なる製品は萬里の長城をも打破る所の重砲である」と言つた處の商品であります。

今迄は個々の家庭内で、絲紡車で紡かれて居つた、其生産物も大規模な紡機で、より安い物が出る様になり、それを使ふ方が便利でもあり、好ましい事であるが爲に、順次に家庭工業は之に依つて置き換へらるゝ様になつて來る、即ち此低廉なるものは、機械による生産物であると云ふことで斯くして此物を用ゐらるゝ様になる、殊に機械による生産では、生産が迅速であると共に、整一なるものを得る様な、色々の便利があるが爲に、機械の産物は、萬里の長城をも打破り、世界の至る所隅々邊々迄も用ゐられる様になつて參ります、此勢に煽られて更に機械を使ふ者が増加して來る、斯くて資本に依つて率ゐれた機械が生産の第一義を占むるに至りました。

然るに茲に偶々或人が機械を作り、それが一番新規の機械で、一番低廉に品物か出來ると云ふ

こととする、舊式の機械を使つて居る人々は、之が爲め壓迫を蒙らざるを得ぬ、従つて事情之を許すに従つて段々にそれを買つて、良い物を益々低廉に製作する様にする、斯の如くに、良い物が出來ると云ふ事情が、矢張りそこに不斷の進歩がある事を表はすのである、其結果は更に又機械が改良され、もう少し廉い物が出來るとどうしてもそれを使はなければ、敗けて仕舞ふと云ふ譯で機械の改良機械の進歩と云ふ事が限りなく、繰り返されて行きます。

如斯きは全く資本主義經濟組織が、機械を愛好し、機械を生んで、現在のやうな天地を作りました所以であります、然し其究極する所はどうであるか。

人の子供が天國にとどきたい、天國にとどくには、天に行く途を作るに若くはないと考へました、茲に於て石を運ぶ者あり、土瀝青を以て、凝固める者あり、土を擔ひ來る者あり、斯る人の子等の努力は、段々と高い塔を作つて行つた、何時か天にとどくだらうと云ふ希望を持つて。斯かる希望の下に築いた塔で、何時天にとどくだらう、天は相變らず高く、更に達することが出來ない、之れ即ち「バベル」の塔である。

人の子の積んだ「バベル」の塔は何時まで積んでも、天にとどかない、手段方法が發達して、良い機械を使ひ、其上に機械を積み重ねて、其機械で經濟生活の問題が解決されるものならば、我々の問題は既に解決されて居なければならぬ。もう機械を作つてから、二世紀近くなつて居るが、一向解決されない點がある、一向技術で改革出來ない點がある、技術も機械も、人間が使ふ物、組織を

通じて使ふものである。従つてこゝに、より以上の何物かゝ無くしてはならぬ。それを掴まない以上は、幾千の機械何するものぞ幾千の技術何するものぞやである。此より以上の物を掴むことが我々の考究しなければならぬ問題になつて來るのであります。

茲に論點を再轉して舊に歸ります。一體斯くの如くして資本主義の經濟組織なるものが段々と出來て來たのであります。此資本主義經濟と云ふものは、企業中心の經濟即ち利潤追求の經濟の特徴といたします。「マルクス」が資本論で示した有名なる次の公式を借りて、之れを説明します。

$$G-W \left\{ \begin{array}{l} P_m \\ A \end{array} \right. \dots \dots P \dots \dots W' \dots \dots G' \left\{ \begin{array}{l} G \\ P \end{array} \right.$$

即ち資本が各種の生産業に放下せらるゝ場合には、次の様な循環形式を採るものであります。G(貨幣)を以てW(商品)を買入れる。此商品なるものは、生産財(P_m)と労働力(A)であり、企業家は之を組織鹽梅して、所謂生産資本(P)とする。之に依つて新生産品を得る。之は商品資本(W')であり、茲に於て「マルクス」の所謂生命がけの飛躍が爲されて、元來の貨幣の形(G)に還る。この(G)は元の(G)と(同)即ち利潤とになる可きである。

「マルクス」は此場合に、純粹なる資本主義の行はるゝ社會で、社會生産の全體として考ふる時は、利潤が商品を貨幣と交換する事に依つて得らるゝのならば、第一にGをWに代へる場合、他に利潤を得させた事となるに依つて、(G-W)と(W-G)との間に、何等剩餘のない筈である。然るに茲に

剩餘價值が出来るのは、資本家的生産でない勞働力を購入する事に依るのであると稱して、剩餘價值搾取を論じて居ります。

此點に就ては、多少の異論はありますが、兎も角も、此公式の示す處は、其儘賛同を表する次第であります。此公式に示す此産業資本と云ふものが、生産手段を買入れる例へば、製絲工業で申すならば繭を買ひ、工女さんを傭ふ、そして資本家的生産物である生絲を作り、之を賣る、即ち商品生産である生絲が、生命かけの飛躍をして、貨幣に代へられる、此貨幣は投資した貨幣の額より多くなる、即ち利潤を齎す可きであります。

茲に資本主義經濟時代の生産事情を説くに當りまして、聊か企業なる概念に就て述べます。企業と云ふのは字義から申ししても、「企てる」「敢て爲す」「引受ける」と云ふ様な意であります。獨逸語の *Unternehmung*、英語の *Undertaking*、何れも同意義であります。即ち自分が責任を負ふて、敢て業を爲すものであります。依つて企業の定義として申すとすれば、「流通經濟に於て、各種の流通行為に依り、生産及び營利に要する物と、人とを自己の創意と責任とを以て買入れ、借り入れ、雇入れて費せるものより、以上の貨幣價值を作り出すことを目的となす、經濟之であると申しませう。従つて企業と云ふものは、利潤に對して危険を負ふものであります。

例へば或る事業を爲すとす、損をするかも知れない、此損は企業者たる吾輩が引受けてやらうと云ふものであります。

勿論の事、損は企業發生前の昔に於てもありません。例へば、農業で云へば、二百十日とか、八朔とか、五風十雨、其宜を得ないで、收穫が皆無となつたと云ふ様の事がありました。

然し之れは天然による危険で、之等は技術的進歩を來した今日に於ては、或は品種の改良とか栽培法の進歩とかに依つて、大に輕減せられて來ました。之を他の農業以外の事業に於ても、觀る事が出來ます。然しながら、斯る自然的危険の程度は順次減少し得ましたが、更に自然的危険に倍仰する様な危険が生じて來ました。

即ち一定計畫の下に生産設備を整へ、商品を生産しても、其商品が賣れるかどうか、賣れると思ふて生産をするが、賣れないかも知れない、賣れない時には損を招く事は必定である。

然し萬一の損は、私が引受けてやつて行かうと云ふ人があればこそ、水力、電氣事業が山の奥に起つたり、或は人造肥料の會社が起つたり、藥品、食料品、化學工業、鑛山業等の會社が起つたりするのであります。

如斯く損をしたら、俺が引受けてやつて行かうと云ふ人がありますが、故に、事業が盛に起り、企業が發達するのであります。之れ即ち先に述べた所の、企業中心の經濟であります。

斯く企業者は、萬一の場合の損を引受けて呉れるのだから、利益を得た場合之を得るのは、當り前であります。損だけお前に脊負はして、そして儲けをやらないと云ふことは、出來ないことです。りますから、利潤肯定の説は依つて來る處ある確かな説であります。

然しながら如何なる制度、如何なる組織にも、絶體的價值のあるものはなく、當時の社會狀態や、經濟事情に依つて進化變轉す可きものでありますから、利潤肯定説も亦、斯る見地から觀る事を要します。

例へば「マルクス」が地代は土地より出るものでなくて社會より生ずるものだ」と申しました様に、總ての事態は社會を基調として定まる可きものであります。

言葉を換へて申せば如何なる制度でも、組織でも、それ自身存在の目的を持ち、使命を有して居るものであります。

然し其制度や組織の目的が達せられ、使命が遂行せらるゝに従つて、他の制度や、他の組織の出現が必要である様になつて來ます、前制度、前組織に不備な點や、不便の出來て來ますに因りまして。而して此點になりますと、新制度、新組織に振り向ける必要があるものであり、之れには其社會に住める各人が己を空うして、之に就て、考慮する必要があるものであります。

再轉して論じます。

利潤を得ると申すことは、現今に於ては當然なる事であり、然しながら、此制度が永久かけて據る可き制度であるかどうか。

利潤を得る制度は、吾人の利用の天地を擴大す可き使命を有して居りましたが、やはりそれ自身は手段であります。故に、其手段が進む中に、目的ともなり、實は眞の利用の社會なる目的から

遠かる様の結果をも齎し來る様になる傾が出て來たのであります。

より良き制度、より良き組織に就て考へる事は、現代人の責任であると云はねばなりません。扱話題を始に轉じて申します。

今日に至るまでの間の我々の打立てた處の資本主義經濟技術的進歩發展、それ等は當初より二世紀を闊しました但其間に於ける歩み方を暫く考へて見たいのであります。

それは今日之を如何に潤色^{モディファイ}するかに就て考慮するには、是非其制度の過去に於ける歩み方を考へて見なければならぬのであります。

私は産業革命が、英吉利を中心として行はれたことを申しましたが、當時の英吉利には、發明の才がある人が簇出しましたし、一方又經濟學の方面には「アダム・スミス」の自由放任經濟學說が一世を率ゐたる學說であつたが爲に、兩者相待つて英吉利が産業革命の第一人者となつたのであります。

抑資本主義經濟發達の經歷を觀ますると第一には直接消費に供せらるゝ資料を生産する事に於て行はるゝを常とします、英吉利に於ても紡績工業、織物工業に於て其發達を觀た事は、前述せる所であります。

資本主義經濟組織と云ふものは、其發達過程に於て、それ自體行詰りが出來て來るのであります、此說に對しては各學者によつて所信は異りませうが、然し少くとも純粹なる資本主義經濟と

なつて終つては資本主義經濟組織自體には發達しないやうな行詰りが多少とも出來て來るものであります。

資本主義經濟が發達する爲には、依つて是非とも、資本主義圏外の社會がある事が必要である。資本主義社會以外の經濟地域が必要であるのであります。

而して此圏外の者に、資本主義經濟組織内に於ける生産物を賣つて、「マルクス」流に申せば、剩餘價値を吸ひ取つて、該資本主義經濟組織が發展して行くものであります。此事は前述せる英吉利に於ける資本主義發展の歴史的觀察に於て觀る事を得ます。

即ち第一番に發達したのは、同國「マンチェスター」附近の紡績織物、即ち纖維工業に於て之が盛況を觀たものであつて、所謂「マンチェスター」で率ゐられた資本主義經濟に英吉利はなつたのであります。

其原料綿はどこから來たかと云ふと、「リバープール」港から荷揚げをされた埃及或は米國産の輸入綿で、「マンチェスター」及び其附近に於ける工場では、之を使つて資本制工業經營を行ふたのであります。

而して其生産物である商品を、資本主義圏外の社會に賣つて、「マンチェスター」中心の英吉利の資本主義經濟が發達したのであります。

然し斯る發展の過程には、矢張り限りがあり、或る程度まで行くと、恰も自家中毒症とも申す可

きか、それ以上發展出來ぬのみか、何とか改善を加へねばならぬ様の點になつて來るものであります。此域に達すると、一變轉を必要とするのであります。

一體如斯き消費資料を生産して、相當有利に經營が出来る内はよいが、新しい國々が段々とも早之等と競争するが困難となつて來今迄得た様の利益を得られぬ事となります。

此域に達すると、寧ろそれでは紡績機械を造つて、それを輸出する事を以て、新機軸を出して一轉し様と云ふことになつて來るものであります。

英吉利の事情は將にそれであつて、「バーミンガム」中心の鐵機械を生産する資本主義經濟に變つて來るのであります。

斯る變化は、段々と不知不識の間に、移動して行くものであり、直接消費資料を造る、經濟手段から、生活資料を造る所の高級なるものになつて來るのであります。即ち「マンチエスター」から「バーミンガム」へと云ふ途を取つたのであります。

然らば吾が日本の國は、一體どう云ふ風に資本主義經濟が發展して來たかと申しますと、矢張り今私の申したやうになつて來たのであります。

例へば私の子供時代に、私の母は足袋を私の爲に縫つて呉れた、無論布片は買つて來たが、足袋の型があつて、それで作つて私に履かして呉れたのであります。

所が今は、義經足袋、福助足袋と云ふやうに、色々の足袋が出来て、商品として市場で自由に購ひ得る様になつて終ひました。

私共の家にあつた絲より車や、機械臺はどこに行つても無くなつた代りに、巧妙な紡績機械や、力織機が盛に用ゐられ、之等の活動に依つて、誰が作つたか判らないやうな商品が、市場に出て來、之等の物を買つて居る現狀となりました。

それ御覽なさい、「マルクス」の所謂「低廉なる商品は萬里の長城を打破る重砲である」、斯う云ふ所に來て居るのです。

今日の農民はどう云ふ物を履いて居るか、昔は冷飯草履や、草鞋であつたが、此頃はあのゴム靴に變つて居る、どこかの工場で、資本主義に率ゐられて製作せられた最も低廉なる物を購入して居ます、そして、高價な物はどしどしと市場から追ひ除けられて、姿を隠して居ります。

本當に誰か、大きな聲で、組織よ變れ、制度よ轉せよと、號令を掛けるやうに、産業界のことが十年なら十年、二十年なら二十年と云ふ一期で、本當に見えざる手に導かるゝと云ふか、世の中の事態が、獨りでに變つて來るのであります。

縫つた足袋に代ふるに、福助足袋、義經足袋、草鞋に代ふるに、ゴム靴であります、日本の經濟狀況も、將に左様であつたのであります。

一體日本の資本主義經濟と云ふものは、何時頃から始まつたかと云ふことから批判して見ま

せう。

日本も亦、文明國が經過す可き社會制度として、封建の時代を持つて居りました。徳川氏の治下に、天下三百の諸侯が、江戸を中心として、經濟時代を組織して居りました。實に千代田城頭、春風怡蕩たる中に、眠つて居つたのであります。

然るに突如として、米國はじめ、諸外國からの通商五市の要求に醒されて、長夜の眠より覺めねばならぬ事となりました。

此通商五市の要求こそ、資本主義經濟の先進國から、新市場開拓を目的として、到來したものであります。―勿論内には、帝國主義的領土擴張の勃々たる野心もあつたのであります。―其根本は資本主義的に行詰つたので、押寄せて來たのであります。

即ち我々の資本主義的經濟の良い御得意になつて呉れると言つて來たのであります。で、駭然として、日本は覺めて今まで持つて居つた、封建の社會經濟制度と云ふものは、瓦解せざるを得ぬ事となつたのであります。

全然違つた資本主義の經濟が世界の大勢として、此處女地たる日本に向つて來たのであります。そこで日本の封建時代の經濟制度と云ふものは、瓦解々體して仕舞つて、新らしき時代が持ち來されました。

之を名付けて明治維新と云ふのであります。

明治四年に廢藩置縣になり、今まで御領主様に、五公五民だとか四公六民とか云ふやうな年貢米を上納して、隸屬して居つた、農民は農民解放で自由になつたのであります。

其他商と云ひ、工と云ひ、各人何れも諸藩の下に色々の制度で、束縛せられて發展が出来なかつたのであります。此工業者、商業者何れも其束縛を脱して、自由なる經濟人として其活動をなし得る様になりました。

然し明治維新となり、自由主義經濟時代が出来たからと言つても、當時の人々にはまだ封建の殘んの夢があり、其教養を受けて居つたのは封建時代の教養であり、流るゝ血潮は封建時代の傳統的の血潮だ、彼等をして新らしい經濟主義に持つて來ても、それは無理な事であります。

茲に於て明治新政府では先づ、自由經濟時代の經濟人の出來上る間官業を以て各種の工業經營を爲す事といたしました。

即ち勸業寮の各種模範工場の如きは之であつて、製絲工業は群馬縣の富岡に、製絨所は千住に、紡績業は群馬縣の新町にと云ふ風に、各種の工業の模範經營を政府の手で行つて、國民に之を教へてやりました。

其結果經濟人としての修養が、だん／＼進み、企業界の人も出來得る様になりました。

農商務省が出来たのが、確か明治十四年かと思ひますが、明治も十數年とたつ内に、官業でなく、民業を以て事業を爲さしめ得る様になりましたが故に、段々と官業の拂下げを爲しはじめま

した、富岡の製絲工場の如きも、明治二十六年に三井に拂下げ私人の經營となりました。

本邦の資本主義經濟の芽胞が出来たのはこれからであります。

本邦の資本主義經濟はやはり、外國の例にあるが如く、消費資料を作るのが一番初めであつたのであります。消費資料の生産は販賣も比較的容易であるし、原料も自分の近くから得られますし、又買つて来た所で極簡易なものでありますから、之に移るものであります。

而して當時は又廉い労働賃銀があるから、技術は拙いが經營は比較的うまくやり得るものであります。

本邦で消費資料の生産業として、一番初めやりました事業は、資本主義經濟に依る纖維工業でありました、これが前述する様な利益がありました爲に、順次に發達して、木綿紡績で申せば、外國から紡績機械も綿も買つて来て、大規模に經營せらるゝに至りました。

其當初は、技術も幼稚であつたが爲に、重に太絲を挽いて居つたのであります。

然らば何が故に、斯く外國の機械も入れ、亞米利加の綿も買つて、經營が出来るばかりか、大工業となる事を得たかと云ふに、當時の日本は労働賃銀が非常に低廉でありましたが故に、生産した商品を廉く供給し得たからであります。

此低廉な商品『マルクス』の所謂『萬里の長城をも打破る重砲』を國內に賣つて見たら廉いから誠によく賣れる、絲より車で『ブンク』やつて居るのに較べれば、機械紡績の方が餘程物が

良く、價も廉いので、國內の隅々まで行き渡つて仕舞つたのであります。

斯く國內と申せば違ふじやないか、同じく資本主義の圈内ぢやないかと申されるかも知れぬが、資本主義經濟と云ふものには、國境はない、國の内でも、まだ發達しない農民とか、發達しない工業者とかと云ふ者は、矢張り本當の意味に於て、資本主義經濟から云へば國外に屬します。

さう云ふ人に廉く賣つて彼等の創造した所の價値を貨幣と云ふ形で集めたのであります。「マルクス」の言葉を其儘使へば、剩餘價値で資本が太つて來たのであります。

其結果は今迄より、より廉く出来る、其生産して商品を農民だとか、まだ發達しない經濟人に賣つてやる、そして金を儲けて資本が出来る。

斯る事を繰返して、どん／＼雪達磨が雪の庭を轉がるやうに、太り太つて行く様に、産業資本が増殖し、大規模工業が出來たのであります。

而して斯る企業家の産業資本が、まだ資本主義經濟的に發達しない所の農民などに依つて、生産された所の物を買つて來て、主要なる原料とします。

此生産の中には、資本主義的に考ふれば、少しも利潤が入つて居ならず、利潤抜ききの生産物 (P_m) であります、之を廉く買て來、労働者を雇入れて $(G - W) \left\{ \begin{matrix} P_m \\ A \\ P \\ W \\ G \end{matrix} \right\} (G)$ となり、それで資本が増殖して行きます。

即ち「マルクス」の言ふ産業資本の循環の形式が、完全に行はれて來るのであります、恰も資本は

雪達磨のやうに、段々太つて大きくなつて行き、三百萬圓千萬圓と云ふやうな會社が出来て來る、而も其利益配當も、五割も、八割もと云ふ様に、うまいことをやる様になります。

然しながら、さうなつて來るのも、或時代の事であり、英國の様に「マンチエスター」中心の資本經濟から、「パーミンガム」中心に移れたから宜いが、移れない様であれば、其處で行詰りとなり、困難する事は明な事であり、

日本の今日の經濟的の行詰りと云ふものは、一時的現象も中にはありませうが、私は其中には前述した様の、根本的の因子もあるだらうと考へて居る者であります。

殊に本邦の纖維工業が、盛んになつた譯は、前述せるものの以外に、重大なる關係があります、即ち資本主義經濟的に發達せざる、支那大陸を片方に持つて居る、之であります。

吾が國は、歐米各國から較ぶれば、比較的廉い勞働賃銀であり、比較的早く眼覺めて機械を利用せる生産手段をうまく使ひ得る人間であつたと云ふ事が特徴で、資本主義經濟が獨り國內相手たるに止らずして、支那朝鮮其他亞細亞大陸を舞臺として、發達するに至つたのであります。

日本の資本主義經濟の發達を觀る爲に、私は此處に會社の資本金の數を掲げましたが、二十六年に會社に對する古い商法のきまりがあつて、三十二年四月に新商法が出来て、それから勢をなして、日本の經濟が發達しました。

次表に示しますのは會社數と、其拂込資本金額であります。

明治二十八年

二十九—三十三年五年平均

三十四—三十八年

三十九—四十二年

四十四—四十八年

五十九年

大正十年

十一年

會社數

資本金額(千圓)

二,四六

一七〇,〇四七

六,七六

六〇,一九六

八,八七

九〇,五七〇

一〇,七九

一,一〇五,六三〇

一五,二六

一,九〇五,二五三

三,四六

四,七五,二六七

三,三〇三

九,三二,〇八一

三,八九六

一〇,一〇〇,一五〇

前述しました様に、日本の經濟的特徴は、産業革命的に早く眼覺めたと云ふことと、眼覺めざる
 老大なる支那を隣に持つて居ると云ふことと、低廉なる勞働を持つて居ると云ふ、三點が東洋に
 於ける日本經濟界の強味でありました。

依つて日本國內の需要に遍く應じ得る様になれば、外に競争して事業を行つたのであります。
 斯くなつては、日本の産業革命の先生である、英吉利も遣り切れない、幼稚なる後進産業國だと
 思ふて哺育してやる積りでいろ／＼便宜を圖り、教導してやつたのに、其日本が反つて商敵とな
 ると云ふ有様です。

日本人が「マンチエスタ」邊の工場を見學に行く、始めの中は喜んで見せて呉れましたが、日本人が見て歸ると直に英國の眞似をして、英國の販路を侵すと云ふ有様なので、今度は日本人に對して非常に警戒すると云ふ事になつて終ひました。「マンチエスタ・ガーディアン」と云ふやうな新聞は、よく日本を悪く言ひますが、それは當然のことです。

如斯くして、日本は歐米各國と競争をして、東洋の天地で商權を争ひ、低廉なる勞働賃銀を強味として、優勢なる位置を占め、殊に支那市場に於て其覇權を振ひました。

所が支那も、資本主義經濟的に眼覺めて來ました、斯く支那が眼覺めて來ると云ふと、支那の勞働賃銀の方が日本より遙かに安い、廉いと云ふとどうなるかと申しますに、支那人も、自分で紡績工業をやる事になります、勿論最初は太絲紡績でありました。

左様の有様でありますから、今度は太絲でやつて居つては日本の紡績は競争上危いから、何か新しい方面で競争する事はないかと云ふ事になり、細絲紡績を以て之に代る事になりました、若しそれでいかなければ日本の紡績事業は行詰りと云ふやうな事になつたのであります。

斯様になると今迄よかつた支那が、悪い支那になつて來たのであります。

資本主義經濟と云ふものは、畢竟さう云ふ行詰りが出て來るもので、如斯きは即ち其第二期の特徴であります。

其第一期は前述せる様に、内國を相手として、剩餘價值を取つて來ては、資本増殖の原理が行は

れ、其お蔭で企業の形態が段々に大きくなつて、小企業が壓倒されて來るのを特徴といたします。資本主義經濟が第一期の末期に近きますと、今迄の様に多くの利益が無くなりますに依り、茲に當然窮餘の策として、原料生産業だとか、製造工業だとか、餘に分離して居るからいけない、之を綜合して其間の不利を去つて、利益を擁護し様といふ事になり、其極は企業の合一と云ふ様のことが出來るのであります。

それが資本主義經濟の第二期であります。

第三期はどうなつて來るかと思しきと、今迄の様に迎も國內相手ぢや販路が狭過ぎていけないから、どうしても造つたものを外國に輸出して、所謂資本主義經濟の圏外に出て行かなければならぬと云ふ事になるのであります。

之れ即ち資本主義經濟第三期の特徴であります。

日本の紡績工業が目下行詰つて居ると云へばさういふ點ではあるまいかと考へられます、然しそれは勿論經濟と云ふ立場から言ふことであります、一轉期を開くと云へばそこに新らしい法式を立てる外はない事となるのであります。

製絲の方はどうであらうかと申しますと、纖維工業の中で製絲工業は斯る見地から申しますと、それにはまだまだ餘地があるやうに思ふのであります。

之に關しては、重ねて申しますが、一體日本の生産資源に就て考へて見ますに、鐵はない、石炭も

貧弱になつた、石油も殆どないで、漸く望みを置くのは、水力電氣だけであります、是もなか／＼資本が入要で、あまり引合はない、所で、晩近水力電氣もどうか、國有にして貰いたいと云ふ様な事を叫んで居る有様であります。

之は餘談でありますが、近頃如斯く非常に多額の固定資本を要し、而も事廣く公衆に關する事業は、國有にして行くと云ふ事は、各國共軌を一にして居ります。

斯く考へて見ますと、又日本の資本主義經濟の發達の餘地がない、ありとすれば何かと云へば、纖維工業であります、纖維工業の内でも、木綿紡績業の如く、綿を買つて來て細絲を挽き出した所で、其綿は亞米利加とか印度とかの綿であります。

資本主義經濟の特徴とする所でありますが、其制度が爛熟の域に達すると、廉い品物の生産と云ふ事のみでは勝てなくなつて來るものであります。

斯くなつて來ますと、獨占と云ふ政策で、此自分の利益を保護すると云ふ狂暴なる蟹の甲羅のやうな者が出て來、どうしても、廉い品物でも切り込むことが出來ないやうに、段々なつて來るのであります。

亞米利加邊りで綿の輸出に對して、面倒なことが將來出來ないとも限らないのであります、然らずとも或は買つて呉れる所に向つて、さういふ風な獨占的の政策を施さない共限らない。

「ラスト」とか「カーテル」とか云ふやうなことがどん／＼近代的の企業形態に發達するのを以

ても、それを知ることが出来るのであります。

して見れば、どうしても頼みになる工業としては、自國の生産した原料と、自國の特殊の技能を用ゐて、之を加工する所の、即ち最善の生産手段、生産方法から作つた所の、Wにして之を輸出するのでなければ將來掛けて、力強き、此發展の素地を持つて居るものではないと云ふことを熱く私は思ふのであります。

今までの、各國發達の經過を觀、又日本の狀況を觀ると、確かにそれは斷言し得ると思ふのであります。

斯く考へて見ると云ふと、私は本當に恵まれたのは蠶絲業だと思ふのであります、恵まれたのは蠶絲業だと重ねて申したのであります。

何故か二百萬近くの養蠶家が兎も角も繭を作つて來て、それを賣り拂つて円を出すと云ふと、こゝで製絲業者が勞働者を傭入れて、之を作りまして一部分は國內で使ひますが、多い時には七割以上も外國に出して居ります。

外國とは、パリの資本主義經濟の亞米利加であります、亞米利加ではどうしても蠶絲產物たる生絲は出來ないのであります。

將來人造絹絲等も發達して來ませうから之に就ては考へなければならぬが、天然絹絲として我國が最も大いにやる位置にあるのであります、資本主義の第三期の外國を販路とすると云ふ

點に於て、私は蠶絲業の將來があると思ふのであります。

其代りそれをうか／＼やつて居ると云ふと、即ち何時までも(5)を得ることを夢みて居ると、そんな發達する素地を持ち乍ら、より以上變つた天地に進み待たないものになるのではあるまいかと云ふことを惧れるのであります。

兎も角製絲業者は、養蠶家が作つた繭を購入して來ます、此繭の中には資本主義經濟的見地からは利潤を含まないものであります。

例へば養蠶家の産繭であります但其値段は十三圓のこともあり、七圓八圓と廉くなることもあり、あります、其繭の中には時あつてか、經濟上合理的な計算をすれば、損失になる様のが度々あります。

然し斯る廉い繭價では、引合はぬと云ふて、養蠶業を止める理には行かぬ有様であります、廉くもまあ其繭を賣らなければ立つてゆかぬ、まあ諦めるさあと云ふ位に、簡單に諦めるのであります、それがそれをいゝ氣になつて購入して、製絲工業をやつて居たならば、私は本當に是は良い發達をなし得べき制度ではないと考へます。

現在に於てすら、欠陥のある此組織でありますから、無論將來に進み得る組織とは思はれない、私はもう少し違つた組織を今から考へて行かんければ、蠶絲業の經營は駄目であらうと思ふのであります。

前述せるが如く、資本主義經濟は其接する所を、それに化せざれば止まざる勢を以て進んで來ました、是は何人が何と言はう共、事實だから仕方がないのであります。

製絲工業も亦、斯業と密接なる關係を有する養蠶業に對して、同様な勢を以て臨んで居ります、此場合、養蠶業をして極度に資本主義的に覺醒せしむる事は、宜を得たものではありません。

然らば如何様に導くか、研究の主眼であります。

私は此處まで申上げたことを、一寸振り返つて見ます、私は斯う云ふことを大體申上げた積りであります。

我々の資本主義經濟は如何なる歴史を以て發達して來たか、是は斷へざる慾求の満足に充てんが爲に、手段たる生産の技術を改善せんとし、各種の機械を改良發明しました、之等は何れも資本主義經濟の愛好する所となり、同經濟組織の發達を來しました、而も此資本主義經濟組織は國境をも越へて、誠に「コスモポリタニツク」になつて來たのであります。

日本も此例に漏るゝことは出來ない、第一期は消費資料、第二期は生産手段と移らねばならぬ事となりました、然し生産手段を作るには、我々はまだ遺憾ながら日本の國では、之に關する生産資源が少ないが故に、之に對しては發達が出來難い、然らば消費資料を作る方面であるが之では織維工業が日本では一番都合が良い。

日本の國民性として、手先の器用と云ふことから、便宜であるし、原料關係から申しても、左様

であります、如斯く考ふれば織維工業の中でも良いものは蠶絲業であらうと確信いたします。是は私の我田引水論でなく、我々は前途益々多幸なる所以を前述せるが如き論歩よりも立論し得るのであります。

今度はもう一步進めまして、如斯基前途を有する我々の蠶絲業なるものは過去に如何なる發展をして來たか、又如何に之を導いて行くべきか、如何なるものが我々の行くべき途であらうかと云ふことに就て、論究して見たいのであります。

此事に就ては、矢張り日本の製絲工業發展の道順をたどる必要があり、之に關しては製絲工業の經營制度の進化について、知らなければなりません。

日本の製絲工業も、其當初はやはり家内仕事 (Hausarbeit) でありまして、孟子にある様に「五畝之宅樹以桑、五十者以可衣帛矣」で、自宅へ自分が桑を植ゑて、自分で蠶を養ひ、絲を挽り機を織つて之を半白の老人に献ずると云ふやうな蠶絲業が行はれて居つたのであります。

けれども世の中が進んで参りますと云ふと、此域に止まらないで蠶絲業の經營も亦、工業經營制度の變化の後を追つて、手工業 (Handwerk) と云ふ時代になつて來るのであります。

而して世運の進歩に伴ふて、次には家内工業 (Hausindustrie) となり、次で協業となり、工場制工業に移つて來るのであります、如斯基は工業の經營せらるゝ舞臺、即ち經濟社會の事情に依つて異なるのであります。

經濟社會の進歩は、村落經濟、都府經濟、國民經濟及び各中間に於ける過渡時期がある事は申すまでもない事であります。

此村落經濟時代には、工業經營制度としては、手工業が最も盛なるもので、親方が徒弟を入れて加工業を爲す極く小規模なもので、生産物は直接需要者に渡すものであります。

然るに時代の暗遷、黙移が都市を中心とする經濟時代を生む様になりますと、生産品の市場も大きく、需要も大となりますにより、茲に生産者と需要者との中間階級として、商人が出來、家内工業なる工業經營制度が出來るのであります。

尙ほ進んで、經濟が一國を基調とする、所謂國民經濟時代への過渡期になりますと、當時技術は未だ餘り發達はしませぬが、市場が愈々擴大し、需要が多くなります、茲に於てか制度を以て、技術を補はなければならぬやうな時代が出來て來るのであります。

此制度を以て、技術を補ふと云ふやうな、制度の産物が協業 (Die Manufaktur) と云ふことであります、日本の製絲工業なるものは明かにこれに相當する時代を有して居ります。

例へば家内工業の行はるゝ時、其生産品を購入する商人が、製品の確實と整一とを希ふて、自分の所に工場を造つて、家内工業の就業者を一つの所に集めて仕事を爲さしむる事により、能率を増進せしめ兼ねて又品質を揃はしめんとする制度を爲しはじめます。

製絲業で申せば、前橋地方で云ふと七輪取り、京都で云ふと煙氣取りと云ふやうなもの、即ちこ

の協業と云ふ制度に當るのであります、是は技術進まざるに、市場が進んで來た時、之を制度を以て補ふ所の一つの組織であるのであります。

併し外國ではほんの僅かしか如斯き工業經營制度を見ませんでしたから、多くの學者は之を等閑に附して居りますが、日本では製絲工業に其性質上協業と云ふ制度が現はれて居るのであります。

次に工場制工業でありますが、これは一國が一つの經濟の舞臺になり、國民經濟が完成し、一方無産階級たる勞働者が出來て來る、生産に於ける諸種の技術も進み、經濟機關も交通組織も發達して來ると共に、他方生産せる商品の需要の天地が擴大して來ると云ふ有様なので、初めて茲に工場制工業と云ふものの發展の要素が加はつて來るのであります。

而して此工場制工業なるものは、資本主義經濟に依つて發達し得るものなる事は、論ずる要がありません、而して此資本主義經濟は前述せるが如く、觸るゝ所資本主義經濟に化せざれば已まざるものであります。

丁度希臘神話の「ミダス」の神様に「此神様のその御手の觸るゝ所黄金化した」接觸する所皆之に化して行くものであります。

資本主義經濟に依つて率ゐらるゝ工場制工業亦然りで、大經營に接觸すれば大經營に、大企業に觸るれば大企業となり、遂に資本主義經濟に依つて統卒せらるゝ世界は、其間多少の差異こそ

あれ皆聯絡ある處のものとなり、誠に「コスモポリタニツク」の經濟組織となりました。

即ち國際間需給相應じ、有無相通する事が、益々頻繁となつて來ました、例へば日本で出來た物を外國へ賣つてやり、外國製の機械を購入するし、時あつてか原料も輸入すると云ふ様になります。

而して如斯き時代に於ける、工場制工業に、「工場制工業と言つても初期の工場制度とは著しく異つて來た」即ち工場制工業の爛熟の域に達したものであります。

其發達し切つた工場制度に於て行はるゝものは、經營の方面から言つて見ると、二つの新らしい現象が出て來ます、一つは經營の濃化 (Betriebskongentation) と云ふことであり、他は經營の合成 (Betriebsvereinigung) と云ふことであります。

然らば經營の濃化とは如何なる事を申すかと云ひますに、製絲工業を以て例て云へば、十數年前位迄は上一番製絲工場の經營單位は、一工場三百釜位で其所有地と申せば比較的原料の蒐集する田舎の地方でも、之が經營を見たものでありました所が、現今に於ては三百釜は四百釜となり、五百釜となり、六百釜八百釜も之を見るのみならず、所在地も郡山とか、福島とか、島栖とか云ふ地方的中心城市に、而も停車場に近く引込線でも出來る様の所に集中せらるゝ様になりました。之れは交通上からも、金融機關、通信機關の上からも、好ましい事であるからであります。

斯くて經營者の能力が、之を許すならば、千釜位迄は其規模を大にして製絲經營をなす様にな

つて來ました、如斯く經營規模の擴大する事が此經營濃化の一つの現れであります。

經營濃化の他の現象は、製絲能率の増進と云ふ事であり、此事に就ても近來或は理化學的に、或は機械的に能率の増進が考案せられて、著しき進歩の勢を示して居る事は論ずる要がありません。

此經營の濃化と共に、行はれて居る事は、經營の合成なる現象であります、此事に關しては先にも述べました様に、資本主義經濟の第二期に行はるゝものであつて、主要生産業に密接なる關係を有する事業を兼營する事を稱するものであります。

例へば原料製造、粗製工業、精製工業、販賣業、副産物精製工業と云ふ様の、各關係工業を同一經營の内で行ふことが之であつて、之に依つて各業の關係が良好となつて、經營有終の美を濟すものであります。

例へば臺灣の精糖會社の行ふ仕事の様には、粗糖は、原料生産地で行ひ、精糖業は大市場附近である東京の市外、川崎とか、神奈川とかにて行ひ、其販賣業も兼營して、需要と供給との調節を行ふ様の事をやつて居るのは此好例であります。

尙如斯き事を、企業的聯絡に於て行ふ場合は、之を企業の一と稱します、例へば企業經營を良好ならしむる爲に、密接なる關係を有する事業を同系統、異種企業形態の下に、行はしむる事が之であります。

製絲工業で申せば蠶種株式會社、精練會社、蛹油搾取會社、或は更に倉庫會社、繭絲會社、絹絲紡績會社等を同系統の企業の下に組織するが如きは、此好例であります、最近には大製絲會社が、金融業として生命保險業迄、同系統の下に營むと云ふ出現すらある有様であります。

如斯き經營の合成、或は企業の一なる現象は、資本主義經濟發達の第二期に於て觀らるゝものである事は前述せる所であります、本邦現下の蠶絲業界に於ても、大製絲企業を中心として、斯る出現のある事は、前々から度々申した處であります。

以上を以て工業經營制度變轉の主要を説きましたが故に、茲に論鋒を一轉して、實際方面から本邦器械製絲工業の發達進展に就て、一瞥をいたす事といたします。

一體本邦に於て工場制の器械製絲が興つたのは何時であるかと申しますと、是は私の舊藩主の名譽の爲に申すのであります、明治三年に前橋藩主松平直克公が前橋の大渡と申す所に、工場制器械製絲を創設せられましたのが、本邦器械製絲工場の濫觴でありました。

世は明治維新に際して、國論沸騰せる中に、産業的に如斯き施設を爲されたのは、寔に一大卓見である、と云はねばなりません。

島津公が鹿兒島に紡績工場を興されたのは、世間周知の事實であります、本邦器械製絲工業の創試が之であると云ふ事を知らぬ者もあると云ふ事は、誠に嘆はしい事であり、私は此事に關しても、何處迄も聲を大にして舊藩主の名譽の爲に申さねばなりません。

然し如斯く賞揚すればとて、驚く勿れ其規模は僅に六人繰の器械製絲であります。

然しながら種子は小なるを以て笑ふ可らず、此小なる種子一度發芽すれば纏ては天の鳥をも巢居せしむる大木ともなるものであります、誠に種子の小なるを以て笑ふ者は、木の大を知らざる者であります、私は此六人繰の器械製絲に絶大の敬意を拂ふ者であります。

之に刺戟せられたと申しませうか、勸業寮に於ても、富岡に、是は佛蘭西式に依つて器械製絲工場を造りました、而して此二つの工場が日本の製絲工業界の木鐸となつたのであります。

之に依つて多くの製絲工場が設立せらるゝやうになり、遂には大倉組に依つて東京の築地に一舉にして、六十人繰の製絲工場が設立せらるゝに至りました。

然し同工場は經營其宜を得ずして、期年ならずして廢止の悲運となり、同機械と工女とは二分して、一つは奥州二本松に、他は信州諏訪に移さるゝに至り、茲に本邦製絲工業の搖籃地とも申す可き諏訪の製絲工業が開始せられたのであります。

當時は諏訪に至るには、鐵路もなく、諏訪湖畔の一盆地であつて、此所へ行くには和田峠とか、鹽尻峠とかを大八車で繭を載せて、恰も蟻が芋蟲の死骸を曳いて行く様な調子で運搬したのであります。

當時諏訪地方には、適當なる副業も無かつたが故に、斯業は好事業として、不屈不撓の諏訪人の氣慨の下に、經營せられたのであります、當時諏訪の周圍の山々は、鬱蒼たる松樹を以て彩られて

居つたそうでありませんが、松樹が燃料材として切り出されて、今日の曠漠たる裸山が突兀として聳えて居る様になつて終ひました。

然らば何が故に如斯く交通機關も不備に、燃料と申しても適當なるものない諏訪の地方で、製絲工業が發展したかと申しますと、それは諏訪人の企業心の潑刺たるものがある事にも依りましたらふが、それにも増した一原因があります。

それは稍擴大した申し方でありませうが、十九世紀の中葉に英國が産業革命の先達をなし得た様に、諏訪人が製絲工業の經營を、當時の經濟事情や産繭の品位等に對應して、經營する最適法を案出して實地に應用した事に基因するのであります。

それは何かと申しますと、前橋藩で示した製絲法は伊太利式で、富岡で行ふたのは佛蘭西式でありまして、其當時の事情に適當しない極めて高尚なる製絲法であつたものであります。

其製絲法の流を採つたのは信州では北信の或部分、或は伊勢室山の伊藤製絲場等であり、之等何處でも非常に苦心研究の結果、實用化する事に努められました。伊佛機械製絲法を直ちに本邦に移す爲には前述しました様に經濟事情から申しても、原料繭の性質からも、極めて都合の悪いものであります。

諏訪人がそれに着眼して極く簡單な粗造の機械を用ひ、所謂「イナツマ」式製絲を考案して、當時の粗惡な原料繭を繰絲するに、最適當なる工場制器械製絲業を開始しました。

此事が爾後四五十年間に於て工場制製絲と云へば諏訪を想起する様に同地の製絲工業が發達した最大原因であります。

今諏訪の製絲工業發展の經過を述べて、工業界に於て觀る所の、集中及分散の現象に就て論述いたします。

發展す可き性質を有して居る或種の工業が、經營せらるる第一期に於て觀る現象は、工業の都市集中であります、今製絲工業に於ける事情を基として、之が概要を論述いたします。

工業の都市集中と云ふ問題であります、次表に示してありますが、諏訪郡の製絲家が縣外に此工場を初めて出しましたのは明治三十三年でありましたが其統計は得られませんから明治四十一年から大正十三年までのものを示します。

諏訪郡製絲家の縣外經營工場

東山	北陸	關東	東北區	四十一年		四十五年		大正五年		十年		十三年	
				工場數	釜數	工場數	釜數	工場數	釜數	工場數	釜數	工場數	釜數
1	1	19	2	50	5	106	6	286	4	270	6	362	
1	1	516	50	10	710	3	950	3	1367	1	1339	1	100
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	2	3	4	287	2	48	1	100	2	70	2	115	

東海	1	1	5	1,000	6	2,131	13	4,857	9	3,579
近畿	1	1	1	1,000	3	1,000	5	2,473	2	1,392
中國	1	1	1	1	1	1	2	850	2	850
四國	1	1	1	433	2	850	1	497	1	497
九州	1	1	1	1	3	1,270	5	3,014	4	2,741
朝鮮	1	1	1	1	1	1	1	390	2	1,010
計	3	6,887	33	2,193	41	1,803	26	2,710	27	2,607

一體或る地方に工場が集まると云ふと、非常に便利がある、例へば鐵道が未だ發達せず、和田峠や鹽尻峠を越して繭を運搬し、周圍の松山を切り拂つて之を燃料として繰絲して居つた諏訪の製絲工業も、其經營が順調に進むと、十九銀行も支店を開設するし、又諏訪倉庫と云ふ株式會社も出來たり、一方鐵道も出來るのみか、貨物線をも引込んで呉れると云ふ様な利益が加はり、該地方は非常に便利が加はつて來る。

尙又一つの工場ならば機械を直すにも態々他地方から職工を呼んで來なければならぬが、澤山工場が出來れば、機械屋も出來る、銀行、倉庫、交通、運輸、機關等總て之と同様な關係であります。

如斯き工業經營上の便利が加つて來るのみならず、該地方は同種工業經營の雰圍氣を作り、之に依つて同工業經營が刺戟を受くる事多大なる利を有して居ります。

斯る爲に、工場が自然一つ所に集るのであり、之れ即ち工場の集中であるのであります。

是は製絲業を以て論じて居るのでありますが、製絲許りではない、あらゆる種類の工業がさうであります、所が如斯き傾向が或程度まで集積すると云ふと、それ以上はどうしても、お互に中毒を起すやうな工合に、發達が出来得ない様になるのであります。

例へば千曲川原で砂を集めて小山を作るとします、砂をかき集むれば大分高くなつて來ます、然しより以上高くしやうと思つて、如何に砂を集めても一定の高さ以上は、なか／＼に高く上らなす。

工業の經營亦然りでありまして、或所に、より以上集まると云ふと、互の競争上、或は地價が高く、或は勞働者の爭奪が行はるゝと云ふ様に、色々の點からどうしても不都合が出來て來ます。

即ち工業集中の利益もあり、又其缺點もあり、此處に良い點が「プラス」、缺點が「マイナス」、差引幾何と云ふ事になり、之が零の點迄は先々よいとして、僅少なりとも「マイナス」の方が多くなると、工業の集中なる現象は、一段落となり、どこかに同工業の進歩發展を求めなければならぬ事となります。諏訪の製絲工業が、此域に到着しましたのは、明治三十年代のことであります、日清戦争のお蔭で、戦後の事業擴張と云ふ事が著しく、日本の資本主義經濟を煽つて工場制工業經營が各地に發達する氣運になつたのであります。

製絲工業亦其例に洩れず、同工業の先進者である諏訪の企業家も、段々各地に其發展の餘勢を

向けたのであります、又此事に依つて、一方の活路を求めたのであります。

而して其第一歩は、先づ當時養蠶業は發達しては居るが製絲工業之に伴はなかつた埼玉縣であります、即ち中仙道高崎から初まつて、赤羽根邊に至る間に澤山出來た製絲工場は、即ち當時の遺跡であり、諏訪人の第一期の擴張發展地であります。

而して其第二期は東北、第三期は中國九州と云ふやうに、内地の製絲工業經營上いゝ所と云ふ所は皆之に依つて占められたのであります、恰も上手の碁打ちが要處要處に石を下します様に。現今も尙此勢は變らずに、製絲工業經營上の利益を逐うて、工場を建設して居ります、輒近局面は朝鮮に展開して居る様であります。

「アルフレット・ウエーバー」(Alfred Weber)と云ふ人が、工業經營の位置に關して詳しい研究がありますが、非常に面白く高等數學を使つて研究してあります。

(Über den Standort der Industrien) 之に依ると、工業經營は原料が引張り、勞働が引張り、需要の方面が引張るのであります。

此理から推して觀ますに、製絲工業では、何と申しても、一番の引力は、原料繭であります、其次が工女さん、即ち勞働者であります、即ち工女さんと繭此二つのものが、製絲工業の最も大なる引力であります。

第三の引力である需要地は、徳川時代の昔はいざ知らず、今日に於ては輸出生絲が大部分を占

めて居る關係上、外國でありますから先づ論外に於て可なりであります。

信州製絲家發展第一期の埼玉縣は、當時養蠶は比較的發達して居り、本庄、深谷邊に大なる市場はあるが製絲は餘り發達して居なかつたものであります。是は確かに製絲經營上いゝ所であつたのに違はありません。

即ち私の申した資本主義經濟の下に經營せらるゝ製絲工業に對し、其資本主義圈外の地方に相當するものであります。

資本主義經濟が其圈外の社會と交渉すると、或程度迄は兩者共に利益を得るものであります。如何なる良い制度でも社會の一部の者に假に少しでも不都合を生ずる様の場合には、其制度はより以上發達せぬものであります。

資本主義製絲工業經營が、埼玉縣に發展しはじめた時に於いて、勿論同縣の養蠶家は繭買が買つて呉れるより、より以上有利に工場に賣るやうになり、工場も亦養蠶家の繭を購入して他地方で買うより遙かに有利であり、そこで兩々相待つて同縣の蠶絲業の發達を來たしたのであります。

資本主義製絲企業者は、其産業資本(G)で生産手段である原料繭(H)を購入しました。此原料繭は資本主義的に自覺せざる養蠶家が、營利經濟的に評價せざる、即ち利潤を加へざる單なる商品であります。

生産手段の他の一つたる労働力(A)は、婦女子の季節的にして副業的意味を脱せざるものであります。

工場設立當時に於ける發展工場の利潤の多大であつた事は、蓋し想像に餘りあるものであります。丁度雪達磨が雪窟をころがる様に、三百釜の工場が五百釜となり、五百釜の工場が八百釜となつたのは何も不思議はないのであり、「マルクス」流に云へば剩餘價値を吸ひ取つて肥へ太つたのであります。

然しながら如斯基製絲工業が出来た爲に、其地方の人々は嘗に養蠶家のみならず、多少の關係を有するもの何れも、幾らよかつたか知れませんが、従つて斯る大事業が地方に召來する事は、一般に好ましい事でありますから、今日も尙工業家召來と申す様の事が流行するのであります。

どうか資本主義製絲家さんお出で下さい、敷地も廉く周旋いたしませう、株も半數位は地元で應募しませうと云ふやうになつたのであります、是はどこでもやつて居ります。

資本主義製絲工業の發達は、如斯くにして進んで來たのであります、それは或る發達の階程として結構な事でありました、丁度階段は二階に登るになくてならぬものであるが、一旦二階に登れば、更にそれ以上三階、四階に登る爲の階段に依らねばなりません。

然しどの階段も、一段高く登ればそれ丈け上の階に近づいた事となるものであります、資本主義製絲工業發達は、或程度迄は非常によかつたのであります、さう云ふ譯で本邦製絲工業の第二

期の發達が出来て来たのであります。

即ち製絲工業の都市集中から、地方分散の傾向と云ふのが之であり、埼玉縣に發展し、東北地方に向ひ、更に各地に向つて行き、而して今日を觀るに至つたのであります、而して到る所資本主義圏外にある蠶絲業者から、愛好され、喜ばれて居つたのであります。

然しながら、斯く進展して行く中に、資本主義經濟の特徴として觸るゝ所皆資本主義化して來る事が始りました、即ち養蠶家が、其産繭を製絲家に賣つて居る中に、養蠶家も考へた。

斯う云ふ風に産繭を賣買する事は、以前の繭仲買人に販賣した事に較ぶれば勝ること萬々であるが併し我々の繭(繭)は資本的利潤を含んで居まい、我々も資本主義經濟に倣つて、我々の繭(繭)を本當の意味に於ける(繭)にするやうな一つの組織を作るのがいゝぢやあるまいか。

今迄は不識して製絲業者を肥して居たが、佛の顔も三度と云ふ事がある、何かやらうと云ふ其時期になつて來たのであります、それが所に依つては、繭市場となり、株式會社組織で經營せられ、或は更に産業組合の繭市場として現はるるに至りました。

而して到る所さう云ふ組織に依つて、自分の利潤擁護のものが出来て來たのであります、觸るゝ處のもの皆資本主義化する其性質に依つて、農民の作つた單なる商品も、資本主義經濟の利潤を加へた物となす所の、一つの機關を作るに至つたのであります。

如斯き組織は、各縣共に、多くの例がありますから、今更謀々を要せざる處であります、然らば何

極く普通に考へて觀ましても、生絲が二千圓其生産費が四百圓要すとせば、暫く利潤の考を抜いて考案すれば、原料の繭價は千六百圓である。

依つて生絲なる價值、及び價格創造なる點より觀れば、養蠶家の四に對し製絲家一と云ふ割合となり、生絲の格とか、其他の條件に依つて違が有らませうが、一に對する四でなくとも三とか三幾何と云ふものである事は、詳論を要しません。

如斯く生絲なる價值創造に對し、養蠶家の寄與する所大なるものがあります、此間製絲工業が非常に専門的の技術を要する面、到な工業に例へば人造絹絲工業の様であれば、之は別物であります、現在の製絲工業なるものは、技術的に考ふれば幼稚極まるものであります。

斯く申すと製絲科卒業生の多くの諸君を輕蔑する様に聞ゆるかも知れませんが、事實は將に之に反して居る、諸君の努力に依つて、此工業の進歩發達が促進せられなくばならぬとせば、斯業の幼稚なる程、諸君の前途益々多望なる所以であります。

斯く逃れ路をつけて置いて、再び本論に戻ります。

製絲原料繭が、生絲の生産原價の大なる割合を占めて居ると云ふ事、及び原料繭の價值評價が至つて不合理である場合もあると云ふ現狀は前述した製絲工業の經營の比較的單純であると云ふ事と相俟つて、地方に依つては原料生産者たる養蠶家が、俺も製絲工業をやつて見やうと云ふ様になるものゝある事は當り前の事であり、自然の勢とでも申しませう。

近時各種の方面に於て組合運動が發達して來ました。勞働界に於ては勞働組合運動となり、個人契約の勞働より團體契約に移り、團體による要求が加はつて來ました。

農村に於ては、小作組合となり、小作條件に對して團體運動を起して居る、如斯きは資本主義經濟の發達課程に於て當然觀る可き處のものであります。

乍併如斯きは、より高度の發達に到る處の一段階であつて、之を理想として組合運動も起らねばならぬ。即ちより高度の發達と云ふのは、生産が生活の手段でなく、生活の要求になると云ふやうな時代、さう云ふ時代を持ち來す爲の一制度として、總ての施設が行はれなくてはならぬ。

而して此一施設として蠶絲業界に於ける原料繭生産者の聯合による製絲組合と云ふものは、それに達し得るものであると信じます。

又此事を平易に考へても、當然起る可き運動である事が理解りませう、即ち處と時とに依りましては原料繭の眞の價値を得んが爲の擁護運動であるからであります、即ち製絲經營に於ける利潤を抜きにせるもの、換言すれば養蠶と製絲との企業的聯絡を爲す事であります。

現今の製絲工業の經營は、前述した様に工場制工業として經營の濃化、經營の合成も行はれ、企業の一合として、或は絹絲紡績工業、或は蠶種製造業を、或は蛹油搾取、石鹼製造工業を、更に或は生命保險業等を持ち、技術上から云つても、又組織即ち是等を「オルガナイズ」して行く處に於ても、資本主義經濟組織の下に著しく進歩して來ました。

然し資本主義經濟は前に度々申しました様に、其接する處を之に化せずんば止まざるものであります。科學に基調して起つた利潤中心の製絲業が蠶絲業界に投じた波紋は原料繭を中心とせる價格闘争であります。

之は當然の發達の道順であり、階段であります。然し其頂點迄來れば、其方向を一轉しなければなりません。然らずんば少くとも來る可き時代への道を備へる理には參りません。

今此道理を説きます爲に、製絲工業企業形態論をいたしまして、私の結論である利潤なき社會に於ける蠶絲業に持つて行き度いのであります。

製絲工業企業形態論に用ゐます材料は、全國製絲工場調査表と申しまして第一次は明治二十六年に出版され、爾後數年宛を経て出されて居る、農商務省の調査から算出したもので表の一つの統計を出すに月餘も要したものがあります。表の有難味を御披露してから説明にかゝります。

企業形態別器械製絲工場數

年次	個人	會社	産業組合	其他共同	合計
明治二六	二、二二三	四	一	四七	二、二八〇
三三	一、五七一	二二六	一	二四	一、八〇一
四一	一、四六一	一八一	二五	七三	一、八六五
大正四	一、二五	二四	三九	五五	二、二六〇

企業形態別器械製絲釜數

年次	個人	會社	産業組合	其他共同	合計
明治二六	六〇、四七	六、三〇	—	一九、七一	八五、九八
三三	六、四七一	三、六九	三〇	三、〇六	一三、一六
四一	五、八五	三、三三	一、三三	五、四三	一五、七二
大正四	六、〇四	五、七三	二〇、九六	六、三三	一七、〇五
七	六、四〇	五、四九	六、二六	五、三二	二八、〇六
一〇	一三、二九	三〇、四〇	三、五五	一七、二八	二九、三四

前二表に示しました様に、個人製絲の工場數は明治二十六年より、以下三十三年、四十一年、大正四年と減少しました。これは經營上淘汰せられて基礎あるものだけ堅實に残つた證據であります。其然る所以は、個人製絲釜數の増加を以つても知る事が出來ます。會社企業は、工場數に於ても釜數に於ても著しく増加して居ります。

之は近世經濟の特徴として、株式會社による製絲經營が激増した爲であります。

次に産業組合は、産業組合法の發布せられたのが明治三十三年の三月であります。其前にも

之に似た組織に依るものが碓水社とか、甘樂社とか、下仁田社等がありました。が、組合法に依つて出來たのは宮城縣のものが一番最初であつた様であります。

之も著しき發展の勢を現しましたが、輒近や、其發達の勢がにぶつた様に見えます。

其他共同として挙げましたものは、民法による組合又は匿名組合等でありますが、之も發展の勢が盛でありましたが、最近に於ては著しく減少しました。之は其他共同による製絲工業が株式會社其他會社に振り換つたのが大なる原因であります。

大正十年器械製絲工場企業形態別益數

器械生絲 産額順位	個	人	株式會社											
			合名會社	合資會社	株式會社	合資會社	産業組合	匿名組合	任意組合	合	計			
長野	四	一、九七	五、八五	九三〇	一三、七五	大四	八、七五	一、四七	三、六四	八、八五				
愛知	九	九、七	一、七九	二、三六	四、六三	一	一、〇四	一	一	一九、八七				
群馬	六	五、三	〇	五、三	一、九七	一	一五、八三	一	二、八〇	二七、八五				
埼玉	八	五、四	一、三四	八七	四、四四	一	三、二八	一	一	一八、四〇				
山梨	六	六、三	一、四	三、一	五、五	一	一、七	一	一	一三、三三				
岐阜	四	四、〇	一、〇〇	六、三	五、四二	一	四、〇	一	二、〇	一三、二五				
福島	二	二、九六	一	六、四	四、六〇	一	五、六	一	六、六	九、九一				
愛媛	四	四、八四	一	三、五	三、七	一	二、五	一	一	九、七〇				

山形	三、三零	一五二	一、天八	一、天八	一	四	一三	七、七〇	七、五九
三重	三、〇七	一	一、〇	二、六二	一	三五	一	盟	六、一四七
兵庫	一、七五	一	二、三	三、〇四	一	一	一	一	五、〇六四
京都	二、六	一	一、五	二、八六	一	七	一	一	三、一三三
静岡	三、〇二	盟	三、〇	一、七〇	一	一	一	一	六、〇三三

前の表に示したのは大正十年度に於て器械製絲の産額が十萬貫以上であつた十三府縣に於て製絲企業形態を觀たものであります。

以上の諸表に示した處を以て觀ても製絲企業の形態が個人から段々と共同經營になつて來る事が理解るのであります。是は實情を申述べただけであります。是から我々は何を學ぶか、何を知るか、今百尺竿頭更に一步を進めて、此企業形態別による製絲工業に對する、特異性を研究してみやうと思ふのであります。

個人企業と云ふものはどう云ふ良い點があるかと申すと、是は企業を一人が獨裁して居るか、自分が之はやらうと思へば、獨斷專行で何でもやり得るのであります。それ故に法律の許す處、經營實力の許す處に従ひ、自由な經營が出來、而も敏活にして果斷の處置を採り得るものであります。

然し個人企業に於ては、事業が擴張して來ますと、資金の關係からも、或は企業者としての勞力

も不足する様の場合を生ずるのであります、斯くなると個人企業は、他の法策を建てなければならぬ事となります。

製絲工業で考へて見ますと、個人製絲は前述した様に、現今も可成り澤山にあります、それはある筈であります、何故かと云へば、先づ購繭と云ふ事から考へて觀ませう。

個人企業の製絲家になりますと、購繭時期には主人公自ら馬を陣頭に進めて、家の子郎黨を率ゐて、獅子奮迅の勢でやつて行きます、會社所要の原料繭を多數の雇人を指揮して購入するものと比ぶれば、此事に於ける利益丈けでも尠からざるものがあります。

誠に「アーサー・ヤング」が申しました様に「私有と云ふ魔術の手は砂をも黄金となす」ものであります。

此事情は毎日の工場經營に於ても、之を觀るのであります、即ち工場の經營は小規模ではあります、財力さへ相當なら非常に堅實な經營をなし得るものであります、今日も聞いたことですが、一日に一釜當り八百匁の繰絲能率のある工場があるそうです、(山梨縣東八代郡相興村野呂、小澤製絲場)

これではもう絹絲紡績以上の能率と云はねばなりません、個人製絲で三十三釜とか申しますが、普通の製絲の能率から云へば、二百釜にも當りませう、産業組合の舊式の工場に比すれば將に五六百釜にも當りませう。

如斯き能率の増進と云ふ様の事も、個人企業だから優逸せるものが出来るのであります。以上何れも個人製絲の強味であります、けれども今申す通り、個人製絲者としての勞力が不足する様の事が出来て來ます。

製絲工場の經營もやり、販賣方も、購入の方面も獨りでやり、そうこうして届る内に公人として組合に引張り出される、政治界にも辭退が出来ぬと云ふ様になりますと、茲に誰か内々の者でも入れて此者に仕事の一部分を委せ度いと云ふ事になります。

丁度息子が中學校を卒業したからそれでは蠶絲専門學校に入れて家の業に従はせる事として、姉嬢も年頃となつた製絲工業に明い良い婿を貰つて家業を助けて貰う、上田の卒業生にはあるまいかと云ふ様になります、 \parallel よしんば就職困難になつても餘り悲觀する必要はないと云ふもの？ \parallel 如斯き機運は製絲工業が個人企業から段々と共同企業になつて來る所以であります。合名會社の出來はじめは、伊太利の中古に之を觀ますが、伊太利邊りの合名會社と云ふものが出來たのも、全く其通りであつたのであります。

次に共同企業の一つである匿名組合の起りに就て申します、今から三四十年も前頃は製絲企業は著しく危険性を帯びて居つたものであります、危険も多かつた代りに利潤も尠からずあつたものであります。

處で此危険を何とかうまく脱れ様と考へた末に、と申しませうか何々組と申す様の匿名組合

組織に依る製絲工業が發達して來ました、之は匿名組合なる法律の明文に準據して組織せらるゝものであります。

例へば同族の者、A、B、C、D、Eと云ふ様の者共が集つて、其中のEが製絲經營に明るいから此者に製絲を經營せしむる、之に要する資金を、各組合員が出資するのであります、此資金はEと云ふ營業者の財産に歸するもので、組合員は出資額に應じて利益配當を享くる権利がありますが、第三者に對しては權利も義務も無いのであります。

例へば一萬圓、二萬圓と云ふ風に資金を出して其金が、此Eと云ふ人の營業の財産になつて、事業を經營して行く、處が不幸にして經營者其人が失敗して借金を五萬圓残したと云ふ事になるとします。

茲に於て債權者が組合員の内の資産家を訪ねて、「貴殿の弟さんの御事業に五萬圓貸し越しになつて居りますが、どうか返済して下さい」と申込んで來ましても、我々は匿名組合員である、匿名組合員は第三者に對して權利義務を有せず、お氣の毒だが已むを得ません」と云ひ得るのであります。

匿名組合の製絲經營が比較的多かつたのは如斯き事情にも依ります、然し其當時は組合員の關係は勿論極く密接なるもので、或は兄弟、長兄、次兄、三兄、四兄と云ふ様のものであります、切つても切れない血縁の間柄でこそ、斯る組織が出來たのであります。

處で星移り年代りて大正も十四年の製絲工業となります、匿名組合何々組の組合員も、ことに依れば二代から三代工業位になります。

第一代の組合員、A、B、C、D、Eの内に、幸にして頭こそ禿げたれ生残つて居る者もあるが、多くは次代のA'、B'、C'、D'、E'と云ふ様の者が多くなります、即ち第一代の兄弟の關係から第二代の従弟同志の關係となります、第三代は「は」とこ「同志」中には大禿げ中禿げ大白髮小白髮も居ります。

「何お前俺らが若い時には、和田峠を大八車を押し上げたもんだ」と云へば、「當世の若い者一寸位製絲をかぢつても理解るものか」と頭を壓へつけたがり、一方は早稻田を卒業した、慶應を出た、専門學校を修業したと云ふ勞働問題に興味を持つ様の者が居る、どうして之等の者共が衷から融和一致が出来ませう。

事此處に到ると考へて來ました、法律に依つて匿名組合として法に依る保護は受けて居るが、もつと適切な企業形態に變更して、各自の權利義務を明かにし様と云ふことになります。

「賣家と唐様で書く三代目」と云ふことがあるが、こゝで組織を新にして合名會社とし様でないか、株式會社、合資は如何であらうと云ふやうになつて來ます、如斯き事は現代能く觀る處のものであります。

次に合資會社はどうして出來たかと云ふ事を申しませう、この企業形態も中古の伊太利に之を觀ます、中古の伊太利では海運業が盛でありました。

當時船を觸つて貨物を満載して亞米利加邊に通商貿易に出かけて行く事業が盛でありました。風浪も恙なく歸港しますと、巨額の富を齎し來つたものであります。

然し當時の航海術は頗る幼稚なものであります。昔日本から遣唐使を出しました時、同じ艤をして船を四艘出したそうであり、それで遣唐使の事を四つの船と申しました。四艘の内一艘位は着くだろうと、心細い事ではありませんか。松浦佐用姫が領布を振つて別を惜んだのは無理ならぬ事であり、ます。

中古伊太利の海運事業も左程ではなかつたでせうが、兎も角なか／＼の困難であつたのに違ありません。その上如何に豪商と雖も、自己獨で船も用意し、貨物も積載する事は難事でありましたらふ。

此處で誰か荷物を依托して載せる人はありませんかと言ふ事になり、一定の契約の下に之を引受けました。

斯る制度が出来ますと、それぢやあなたは航海術も上手だし、信用もあるから、私の貨物も載せて下さいと云ふ理で、うまく行けば澤山の富を持つて歸るし、一旦間違へば船も沈没する悲運にあひます。

此場合船を運用し貨物を才領して行く人は、板子一枚の下はほんに地獄ですから船が沈没すれば一身も危うく、載せた荷物はなくなるのは必定でありますから、是こそ無限責任である、處が

頼んだ方は委託した貨物に限る處の有限責任であります。

之を「ソシエタス・マリス」(Societas maris) 即ち航海契約と申しました。然し航海毎に収益を計算するのは面倒だから、之を繼續せる營利事業にしようぢやないかと云ふことになり、有限と無限との責任を持つ所の事業となりました。之れ即ち合資會社の前身でありました。

倫敦の名市長に「デイック・ウキチントン」と云ふ人がありました。此人の立志傳を見ますと、子供時代に孤兒となり、漂泊の生活を送つて居ましたが、歩み疲れて或家の前に眠つ居た、すると其家の人に覺まされ哀れだと云ふので、其儘其家に召使はるゝ事となりました。處が其家は大きく航海事業を行ふて居る人だつたのです。「デイック」は三階の屋根裏に眠かされましたが、其三階には鼠が多くて迎も眠られないで、下から猫を貰うてそれを飼つて置いて、疲れた體を冷い床に横へて眠るのを常として居ました。

處が今度船が新しい航海に出る、誰でも荷物を載せて交易して來てやると云ふ事になりますから、下女下男まで何やかやと船に載せて貰ひはじめました。

「デイック」お前も何か頼まないか、載せて行つてやらうと云はれましたが、「デイック」は猫の外は何物も持ちません。船員は笑ひ乍ら多くの資本主義的産物と一緒に猫を載せて多大の希望の下に海路洋々として錨を上げて出て行つてしまひました。

處が此船が或處に着くと、其處には鼠が澤山居るので其國王は非常に困つて居り、何とか良い

工夫はないかと云ふことなのです、此處で「デイツク」の猫が一番いゝ値に賣れました、尙船は各地で交易をして、多くの財寶を積んで故國に歸つて來ました。

人々は船の平安を喜ぶと同時に、自分への報償が如何であるかを喜んで待つて居ました、「デイツク」の報償が第一番だと云ふ事を聞いて、驚いたのは「デイツク」のみではありませんでした。

これが好運の始りで、遂に倫敦市長となつたと云ふことを中學時代に英語の本にあつたことを思ひ出しました、まあ斯う云ふのが合資會社の初まりであるのであります。

現今でも事柄は同じで、經濟界と云ふ大海を横切つて營利設備を整へて進んで參りますが、信用のある人がやつて居れば、其合資會社は極めて安全で春の海を分くるが如く、洋々乎として進行しますが、下手の人が繰れば船も危いと云ふ様な状態になるのは必定であります、蠶絲業界製絲業界亦是があるのであります。

次に企業形態論として、株式會社に就て述べますと株式會社の起源は、千六百二年に和蘭東印度會社が出來たのが此初めであります。

株式會社は經濟的の理法から云ふと、「アダム・スミス」(Adam Smith)が申しました様に、一旦事業を起して仕舞つたならば、其後は監督して居たら事業の經營が容易に行くやうな仕事に、此組織は最も宜しいものだ。

手近の例で申せば、電車事業のやうなものが之であります、資本金を募集して敷設工事をやつ

て、電車が通れるやうになれば、後は誰がやつてもたいした面倒もなく事業が進行して行くと云ふ、さう云ふ事業に株式會社が一番適當して居ると云ふことを申したのであります。

乍併又他の一面から云へば、株式會社は多くから資本を集めるので産業的「デモクラシー」で利潤を獲得する事の機會均等をなして居りますが、方々から金を集めて事業をやるのでありますから、事業の性質上危険率が高くて、成否の程は理解らぬが當れば非常だと云ふ様な事業にも、危険の分擔と云ふ事から株式會社が適當して居ります。

此事は今の「アダム・スミス」の説明とは反對ですけれども、兩極端であるが故に、又成立ち得る所の話であります、然し株式會社の内にも、變態的のものがありません、例へば宿屋の株式會社、藝者置屋の株式會社と云ふやうなものではありません。

蠶絲業界製絲業界にはどんな株式會社があるかと申しますると、製絲業は昔は前述した様に随分企業的危険が多かつたものであります、今は昔と違つて、生絲の販賣にも、先賣と云ふ事が盛に利用せらるゝ様になり、爲に製絲業の危険を或程度まで軽減したのであります。

其上に近時段々と窮乏せるものが淘汰されて堅實に向つて來ました、加之に前述した様に、大經營が發達して來た爲に、企業も勢大企業とならねばならぬ事となり、此處に株式會社發展の機運が旺盛となるに至りました。

年次	合名會社	合資會社	株式會社	株式合資會社	合計
明治二六	三、五	四、四六	一、四七	—	六、三〇
三三	二、七美	九、八三	九、〇七	—	三、六元
四一	五、七四	八、〇二	八、五七	—	三、一六二
大正四	八、元五	一、三〇	一、三、五七	—	三、五、七三
七	二、三六	一、八、五九	二、六、八〇	五	五、六、四九
一〇	三、三六	一、九、九〇	七、〇〇	八、四	一、〇、二、四〇

論より證據前表に示した様に、製絲工業會社企業中、株式會社は著しき進歩を現はして居ります、これ全く製絲工業の資本主義化を物語るものであります。

今製絲株式會社をより以上詳論するに先つて、之等のものと稍性質を異にする製絲企業として、産業組合製絲を擧げて之と對比して論述いたします、但し産業組合は其眞意義から申せば、企業形態でなく、企業の補助形態であるものであります、暫く企業形態の中に入れて論述いたします。

産業組合製絲は其性質上之を二大別し得ます、其一は即ち專業製絲工業家の組合聯合であるもので、他は養蠶家産業組合製絲之であります。

第一は專業製絲家の作る産業組合は例示して申せば、前橋市の交水社の如き、或は本縣丸子町

の依田社の如きものであります。上田市にある信全社なども之に屬します。

何が故に如斯基組合聯合が、專業製絲業者の間に出来るかと申しますに、之等製絲家は元來小製絲工場であつたものが多く、従つて單獨經營では生絲の嵩が少くて販賣に困難する様の事情でありました。

此状態は遂に生産生絲を共同揚返を行つて纏めて共同販賣をし様と云ふ事に爲さしめたものであります。之に加ふるに更に有力なる理由がありました。

それは何れも貧弱な製絲工場であつて、逆ても個人で金を借りるのではうまく行かないから、もつと大きな組織にして連帶責任で金融の途を得様ぢやないかと、同病相憐んで組合聯合を組織するに至つたものであります。

如斯基二つの理由に依りますから、當時の組合員は此組合に屬することが生命を得るの理由でありました。組合員A, B, C, Dの生存意義は之を擱いては他に無かつたのであります。

乍併如斯基專業製絲家の産業組合の聯合が出来て來ますと、段々に事業が發達して誠に良い工合になり、順次に大經營になつて來ます。此企業形態による製絲工業組織の發達は、著しく早いと云ふことが一つの特徴であります。

例へば景氣が良いと工場を擴大して大きくなる、景氣が悪ければ來年は宜からうと云ふ調子で無理して擴張する、お互に競争し相練磨し、丁度經營の品評會を行ふて居るやうに萬事を行ひ

ます。

従つて此事業の發達は實に偉い勢であります。それが專業製絲工業家の産業組合發展の第二期であります。總ての狀況さへ良ければ産業組合製絲は此第二期に到達して來るのであります。

さうなつて來ると今度はお互に競争してやり切れなくなる状態となります。此時期になります。或一部分の人々が一緒になり、組合の下にあつて更に小なる共同組合と云ふものや、小會社組織と云ふ事で、製絲事業を行ふ處の第三期に入つて來るのであります。

此場合共同するものは同町内で同組合に屬するものとか、或は姻戚上の關係とか云ふ様の密接なる關係から、經營の集中を觀るものであります。如斯くにして經營が比較的大となつて來ますと、自然的に出て來ます考は組合中心でなく自己中心のものであります。

即ち俺の所は一生懸命に絲を挽つて品質本位で經營して、少くとも組合の爲に努力して居るのに、彼の工場では徒に能率本位で粗雜の生絲を出して居る。米國の顧客から小言を食ふのは全くあそこの爲だ、我々の商標維持の爲に努力して居るのにと云ふやうな非難が出て來るのであります。

其極はお互に内輪揉めが出来るやうになるのは必定であります。さうなつて來るとお互がより以上の競争をする様になる。其極は如何なる事が出来るかと申しますと、競争の激烈な結果、經營が困難ならんとするものが出て來ます。

今A、B、C、D組と云ふ四工場が出来たとします。此内のC組が經營が少々拙くなつた然し此組は固定資本が一番多いとします。C組の人々は考へて來ました。現今の産業界では資本主義經營が最も有利であり、勢製絲工業界でも株式會社が盛に設立せられ、其勢益旺なるものがある。我々はあそこに行かんければならぬ。斯くて株式會社熱が起つて來ます。

而して株式會社にするには、此組合を一旦解散して、各工場に就て債權債務を調査し、資産の現狀に應じて、新株式會社の株を持つて行かうぢやないかと云ふやうなことになるのであります。さう云ふことが出来るのは、必度版で押した様に、一番經營の下手な、そして割合に固定資本を多く持つて居る組から出て來るのであります。さうすると、成程株式會社は宜いかも知れない。今の時代の趨勢は將に之に向ふて居るからと云ふことになつて、段々と經營の下手な組から賛成が出て來るのであります。

此處が如斯き組合で最も危い時期であります。其生れた性質が違ふから、今更株式會社に振り換へる事は、實に危いことであります。如斯き制度の變更が好ましからざる事は、斯る事の主張者が經營の最も下手な人からであると云ふ事を以ても、明に證明せられて居る事でありませぬ。

例へば算定したる固定資本の内には、製絲經營の能力とか、信用とか云ふものは、何等評價せられて居りませぬ。我が物と思へば、輕し笠の雪で、愆と二人連れでやつても、製絲經營では大した儲けがないのを、資本の力のみで制度を變更する事は、無謀の極であります。

新制度となれば、何れ是等の人の二男三男が、取締役監査役で御座ると云ふ事で、有象無象が集つて多くの重役が出来て、舟山に登る様になるか、然らずんば何れも資本による搾取をなす丈けでありませう。

株式會社への變更と云ふ事は、專業組合製絲に來る所の誘惑であります、然らば此域に達したなら、如何にするかと云ふに、寧ろ新しい共同企業を發展第二段として、株式會社でも作る方が遙に勝れるの若かざるなりと云ふことになるのであります。

專業製絲家の産業組合に、如斯き誘惑の來る時期は、現在の製絲技術を以てすれば、一萬個位の生絲の生産のある時だと思ひます。

此時期となつたなら、該組合では新しい途を取つて行かんければ、それ以上の發達は出來ないのであります、是は理法の示す所で、何等疑ふ可き所ではありません。

産業組合製絲の第二種のもは、原料繭生産者である養蠶業者の組織する産業組合製絲であります、此事を説きます前に、之と酷似して居る地方製絲株式會社なるものに就て略述いたします。

地方製絲とは私の命名したものであります、村是とか郡是とか、縣是とかの株式會社で、地方の蠶絲業者を基調として、製絲經營をなす所のものであります。

此制度に對しては、私は少々責任がある様に存じて居りますのは、大正二年の五月に製絲經濟

論と云ふ書名の下に、拙著を出版いたしましたが、其結論に理想的製絲企業形態として、地方製絲を推賞して置きました。

今も其の信念を持つて居ります、地方製絲と申しますと、一定の蠶蠶區域内の養蠶家が産業組合なり、株式會社なり、共同企業を以て製絲經營を、現代的の設備の下に組織して、同地區内で一番製絲事業の經營に都合の良い所を選定して、此處に工場を建設して、製絲事業を行ふもので、養蠶家は出資の外に、第二の責任として、其産繭を此製絲に出して原料として提供するものとする。此場合資金に對して、利潤の配當もあるが、原料繭に對しても特別配當の形式で、利潤を均霑せしむる制度を採る事之であります。

序ながら申上げますが、一千九百十三年の五月に佛蘭西の勞働大臣が勞働共營會社案(*Sociétés Participations Ouvrière*)と云ふものを議會に出した、是は資本(*Actions de Capital*)に對してのみ利潤を配當するのでなく、勞働株(*Actions de Travail*)と云ふものを認めた制度であります。

斯くして勞働と資本を一緒にしたやうな、會社の案を立て、議會に提出したのであります、是は議會を通過しませんでした、其案は非常に面白いものと云はねばなりません。

此頃利益分配と云ふことがよく言はれて居ります、是は利益分配以上利潤分配であり、私が製絲經濟論を出版したのは時は正しく同年同月であります。

私の主張する所は、前述せる様に、一定の蠶蠶區域内の養蠶家の出資により製絲工業を經營し

原料に對しても特別配當を爲す様な組織を作るので私は是を地方是製絲と命名します。

此拙著の結論に對して、直接何等の反響もありませんでしたが、二三年を経てから、お前の案は面白い、是非設計書を送つて呉れまいかと、高知縣の某所から申込がありました、之が第一で其後二三同様の賛意を寄せられたものがありました。

爾後官命に依つて、海外に留學して、大正八年の晩秋に歸朝して、蠶絲業界を觀ますと、到る所に此縣是製絲運動が勃興して居りました。

私はそろそろく、學者の豫言通りになつて來る面白いものだと言つて喜んだが、同時に大に憂慮したのであります、私の説いたのは理想であります、所が是が爲し得る程度に未だまだなつて居らなう。

それを中途半端な考へ方で、設立せられては折角の事も目茶くくにされるのは必定である、其會社はよいとしても、後から來るものゝ蹉きの石となるから、これは眞に危いと思つたのであります。

其翌年に茨城縣に講演に參りました、同縣では縣是製絲株式會社が出來たばかりでありました、私は主題を此制度に採つて、同制度は實に理想だが、其經營は危險極るものである。

會社の株主全部が眞に經濟人格が出來て居らなければ、如斯き制度の成功は決して見る事は出來ない、まだく其制度に行くのには、制度に主たる人間が修養を要する、即ち人と人との交渉

が、シツクリ「否」ふ様な時でなければ到底よくは出来ない。

株主だから會社で繭を高價で買つて呉れるだらふと云ふ様な考へでは到らざる事甚しいと盛に感じたまゝを述べました。此處でそれを燒直して見ませう。どいふことを云つたかと申しますと、一體知事さんや郡長さんと云ふ者は、内閣の番頭さんや手代さんである、内閣が代るといふと、一片の辭令で辭令が到着しないで、電報でも代らなければならぬ様になつて了ひます。

處が昔の御領主様は、お國換へと云ふのは先々少い事であり、依つて領内の事に就いて永遠的な事業を當時幾ら手段が幼稚であつたとしても、行ひ得たのであります。或は水利事業とか、新田開發とか申す様に、今日でも尙恩惠を蒙つて居る様なものが出來たのであります。

今の知事さん郡長さん等は何かやりたいと思つても、何時迄が任期だか理解りません、依つて事業好きの知事さんが赴任されると、縣下を一廻り位やつて、此縣は蠶絲業を盛に行ふ縣である、何か斯業を中心として、「吾輩が在職中に如斯き事業を殘して行つた」と云ふ事をやり度いと御考慮遊ばす。

處で私共の書いた原理をみて、學者の説も將に如斯しだと云ふやうな工合で、縣内蠶絲業者を一堂に召集し、蠶絲課長の書いた告辭を知事さんが朗讀し、國の方針も蠶絲業、縣の方針も蠶絲業、感奮慷慨した者は、此處に一味徒黨の連判狀を拵へて置くから判を捺せよと云ふやうな風であります、參會者一同も別に悪い事でないから判を捺すと云ふ事になり、縣是製絲株式會社が出來

上ると云ふことになるのであります。

而して如斯き天降りのな縣は製絲株式會社が出来るといふと、こんな事も出来て來ます、夜にまぎれて縣會議長さんが、知事官邸に訪ねて來て密談をする。

御承知の通り私は交通不便な所から選出されて居ります、あの地方は我が政黨の地盤である事は御承知の通りです、處で今度の縣は製絲の工場をあそこに起す事は出来ませうまいか、勿論目的は地方繁榮策ともなり、我黨の地盤擁護ともなります、若し左様御盡力願へば私は地方を遊説して、一萬株の中三千株は私共の地方丈けで引受けます」と云ふやうな譯であります。

知事さんも我黨の議長だから、事業よりも、我黨が可愛い、吾が事業熱の實現の方が嬉しい、人民よりも、自分の名譽、自分の政黨がより一層大切であるから、同夜の密談が、白晝公々然として交通不便な製絲經營の困難な處でも良い理屈が附けられて行はれる様になります。

そう云ふ風になると、勇將の下に弱卒なしと云ふ事で、蠶絲課の技師で二十三年八月勤めたと云ふ者がある、密かに考ふるに、今が實に良い時期だ、官界の生命も永くはあるまい、恩給もあり、此際老骨に鞭うつて、奔走して其報償として、縣は製絲の技師長にして貰う。」

五斗米を食んだ老骨が、生馬の眼を抜く様な、實業界で何が出来ませう、もう斯様な縣は製絲が出来れば、お仕舞であります、斯の如き縣は製絲が到る處にあるから、不思議ではありませんか。

此種の縣は製絲の外に、又没落した製絲會社を救濟する爲に、縣は製絲の名目を利用するもの

があります、斯うなると縣是製絲は泣いて仕舞ふ。

又一地方是製絲を根本として起つて順潮に進んだものが生一本に進んで行けば良いのに、こゝに依れば純粹なる資本家と、手を握る様になるものがあります、而して此事が會社の發達する要素であるかの如く考へるに至ります。

何が發展だか、こうなつては理解ないのでせう、會社の主義主張が、斯うなると、正義人道を標榜して其蔭に隠れて不正が行はれたり、反人道的の事が簇出する様になります。茲に至つて養蠶家は將に適從する處がない、其歸趨に迷ふと云ふ結果になります、制度が如何に良くとも、生命を吹き込み得ぬもの、生命があつても之を失つたものは、如何とも致し方がありません。

私は日本の製絲界を其經營法式上四つに分けて居ります、第一は資本制の製絲、第二が專業製絲家の組合製絲、第三が私の述べる地方是の製絲で、第四が農民の組合製絲であり、現今三千近くの製絲工場は、只今でも此四種の特色があり、將來又此中の何れかに、振り代つて行くのであります。

扱此第一種の製絲工業はどう云ふ所に發達して居るか、と申します、是は古くから製絲工業が經營されて居る所に比較的多く、殘つて居ります、第二種は古くから養蠶製絲が行はれて居る地方の都會或は都會に類するやうな製絲中心の都市にそれが出來て居ります。

第三種の製絲工業は養蠶業が急激な勢で盛になつたが、製絲工業之に伴はざる所に發達する

傾があります。第四種のもは、どうかと云ふと、養蠶は發達したが、交通機關が未だ發達しないと言ふ所に發達します。

之は即ち前述しました様に、資本主義經濟の圏外であつた地方に資本主義經濟が接觸して來ます。其結果として養蠶家の作つた剩餘價值が搾取される様になります。

茲に到ると云ふと、前述しました様に養蠶家が覺醒して資本主義化して來、其結果として地方が製絲事業に適すれば、組合製絲が組織せらるゝのであります。

所が此第四種のものも、近來其經營が順次に優良なる結果を示して來たのであります。特に長野縣で色々な有益な御調査がありますが、其一として生産費も組合製絲が專業製絲に比し、安くなる。と云ふ御發表があります。將に然りでありませう。

近來農村の工業化といふやうな事が、叫ばれて居りますから、此意味から申しても、組合製絲の發達の機運に向つて來たとも考へられます。

此産業組合製絲の近代的傾向として、交通機關の極めて便利な地方に設立せらるゝ様になり、昔と全く反對の勢を表はして來ました。私は是は當然と思ふ。

何故當然かと申しますと、此運動は養蠶家の創造した價值擁護の運動でありますから、養蠶家が自覺さへすれば何處でも出来るし、出来る上から申せば交通機關の便利な處の方が良いからであります。

一體蠶絲業界に労働爭議があるかと申しますと、ある事はありませうが、血の出るやうな眞劍味のものはありません。ほんに一時の感情的のものばかりであります。何を私が血の出るやうな爭議であると申すかと云ふに、堂々たる男子労働者が自己の背後には、五人六人の家族を率ゐて居る、背で餓饑や泣く、飯やこげる眞こげる飯さへ食ふや食はずである。

此労働條件に對して、或は賃銀問題、或は労働時間問題を携けて、資本家に要求し、容れられずし、爭議を起す、之を云ふのであります。

で如斯き生存要義から出發した、血のにじむ様な労働爭議は、製絲工業界ではありません。若しありとすれば、「見番が不公平だとか」「副食物が不味い」と云ふ程度のものであります。これは無理もない事で、工女さんは婦人労働者であり終身労働ではない。

一家一族を支へて行くと云ふのも僅はありませうが、まあ嫁入りの仕度をする、と云ふ様なもので、どこまでも副業的性質を持つて居る季節的の労働者であります。如斯き事情から製絲工業の労働爭議は少々種類が違うのであります。

所がそれにも勝して、茲に階級闘争が出來れば出來る事情になつて居ると思ふのであります。それは何であるかと申せば、産繭を中心としての問題、即ち養蠶家對製絲家の階級闘争であります。

即ち製絲工業が益資本主義的經營に趨きますと、之に對應して養蠶家も資本主義化せざるを

得ません、或は株式會社で繭賣機關を設ける、或は産業組合で繭市場を作ると云ふ様に、組織に對しては組織制度に對しては制度で向ふと云ふ様になつて來ます。

將に如斯く陣容を整へて來たのではありませんか、若し是が此儘で行つて何とか改善が出来るか融和の途が講ぜられなくば、事情に依り、地方に依つては繭と云ふ其造られた價值を中心として、價格闘争が行はれないとも限らないと思はれるのであります。

茲に於て私は、一つの新しき考を以て、其間を整へて参り度いと思ひます、それは繭は養蠶家の經濟的活動に依つて創造せらるゝ價值であつて、現今に於ては之が製絲家に購入せらるゝ場合價格附けられ、始めて其活動に報いらるゝ利潤を得ると云ふ段取りになるものであります。

此原料繭が前述せる様に製絲工業の主要なる原料であります。

此場合養蠶經營の利潤を無くすると云ふ事は、何であるかと云へば繭として販賣することを無くするか、或は更に其販賣法に潤色を加ふる事で、結局するに養蠶業と製絲業との關係を更新して、新制度を造る事でありませう。

一體資本主義經濟は、其發展過程に於て、海外市場に其利權を得、永く之を持續せんとするものであります、其方策が永く執り得れば得る程其制度の維持が出来る理であります、日本の蠶絲業は目下此域に到達して居ります。

茲に於て私は申し度い、海外相手に製絲工業は如何に資本主義的に傾いても、先づよろしい、大

經營も發生せよ、經營の濃化も企業の合一も新器械の發明技術の進歩も何でも御座れてあります。

然し内に對しては、出来るならば養蠶業者と最も良い聯絡を圖つて、産繭なる價值が價格附けらるゝは繭が生絲として海外に輸出せらるゝ場合に行はれる事、即ち蠶絲業の利潤は、國を越ゆる場合に附く様に、内なる組織を更新する事が必要ではありませんまいか。

而して尙此事が進んで來れば、生絲需要國の消費者とも同様な思想の下に聯絡し、絹として販賣せらるゝ場合に根本を置いた生絲の價格従つて繭の價格が出来る様になりはしないものでせうか。

徒に最後の消費者から掠奪するのではない、公正なる價格が正しき價值に附けられ、各人が喜ぶ様にはなり得ないものでせうか、不常なる掠奪は一時は出來ませうがそれはほんの一時です。

「マルクス」ではないが、掠奪した者が掠奪せらるゝ時が來る、石の上に石が積まれざる時が來ない、と誰か云ひ得可きぞ。

近時吾製絲工業界に於ても、大資本による大經營の間に於ては、順次に原料繭生産者たる養蠶家と聯絡して、共存共榮の實を擧げんとする傾向が出て來ました。

繭の取引方法から觀ても、正量取引、保證取引、延取引等が行はれ、其他取引荷口による賞解、舒賞、桑園改良費の補助等、養蠶業に培う事が盛に考へられて來ました。

然し如斯きは例へて申せば資本製絲家の双手に餘る利潤——其一部分は養蠶家が彼等の爲に作つてやつた——の落ちこぼれを以て行はるゝものとも極言し得るものであります。

従つて此制度よりも一息進んで來て、此利益分配と云ふ所まで入つて來ることは出來ないものでせうか斯くなれば私の理想の天地に更に近づいたものだと思ひます。

學者に依つては勞働者に對する利益分配制度に對して、論議があります、勞働組合の方面からは、殊に此利益分配制度を罵りますが、私は勞働者に對する利益分配制度は、理想通り行はるれば好ましいものであると存じます。

勿論此制度は絶對的に良い制度と云ふ理ではありませんが、次の良きものが出現する迄は據り得べきものゝ一つであると信じます。

資本制大經營を行ふ場合に、原料繭を養蠶家から購入し、一ケ年の經營を終へた後、原料繭の量及び質に對して特別配當をなすと云ふ制度は出來ないものでせうか、これが出來れば利潤のお残りを頂戴するのでなく、正當の權利を以て之を得る事となります。

更に如斯き事が、百尺竿頭更に一步を進めて、恰も佛蘭西の勞働資本を認め様とした如く、製絲工業でも蠶繭資本と云ふ様な形式で一定量の繭を永續的に提供する養蠶家に對して、或程度迄之を認める事は出來ないものでせうか。

更に之に續いて私は、是が可能であるならば、殊に依つたならば企業界に新しい形式を開く處

のものとはなりませんまいかと申しますのは今の企業と云ふものは、企業主體が之を率ゐて、其號令の下に企業的活動の全部が行はれて居ります。

然らば此企業主體とは何を云ふか、事業を經營する人資本を持つて居る人であり、企業主體と資本を持つて居る人と一致する事もあり、或は一致しないこともあり、が兎も角も、此企業主體に依つて率ゐらるゝ事が現代では一番良い方法であります。

けれども將來かけて此事が一番良い方法であるかどうかは、又批判しなければならぬと思ひます、萬一此企業主體が計畫の誤で失敗したとする、其の爲に池魚の殃を蒙る者は尠らずあります。

何を禍と云ふか、企業主體が下手をやつた爲に、資本を出した人も、失敗させられる、勞働力を提供した人も、如何に空馬に怪我なしとは云へ、多少の損害を蒙ります、百年他人の苦樂に依ると云ひますが、今の企業界の有様では、利害休戚は常に企業主體に依つて居る有様であります。

然るに同企業に密接なる關係を有する者、例へば主要原料供給者、勞働者等の内に、同工業に對して著しき企業的才能がある者が無いとも云へませぬ、現在では如何に斯様の者がありとすも、企業に對して何等の力が無いものであります。

此制度は決して完全なるものとは云へませぬから、茲に更に新一轉の途を講じて、如斯き企業的才能ある者を抜いて、企業の「グループ」の中に一つの要素として入れる事とします。

例ば該企業に對し企業家たる資本家が、八十五の力であるとすれば原料を出す者が十勞働組合からも五と云ふやうに、企業に對する實權を定めて、——勿論それは事業の性質に依つて割合は異りますが——各其代表的の人間を以て、該企業の統率をなし、共存共榮で皆が一生懸命にやつて行くと云ふことになつたならば、それは従前のものとは丸で變つた企業になると思ひます。従前の如き企業主體に依つて率ゐらるゝ處の企業ではない、他の者も加へて廣く關係者から衆智を集むるもの、それが私は蠶絲業界あたりで將來の組織として生るゝのではないかと思ひます。

然し是は地球が何百回何千回廻つて來るのか判らないが、太陽が東から出て西に入るが如くに、確かに時代は進んで來るのであります。

どうでせう此頃鐵道と云ふやうに固定資本を澤山掛けたもの、而も公衆に關係する處極めて大なる處のものが國有になつて行くではありませんか、何を意味して居りますか。

大學に「苟日新日々新又日新」とあります、是は即ち日に新なる處の一つの出現でなくて何でありませう、新時代の暗示でなくて何でありませう。

乍併如斯き新時代には恐らく一人たりとも入り得ないでせう、前述しました様に人と人との交渉が更に更に改良せられて、經濟人格が完成し、誠にジョン・スチュアート・ミル(John Stuart Mill)か云つた様に、

“Dig and weave for his country as eagerly as he fights for it”……

少くとも此位にならなくては此社會に入る事は許されない「ガブリニール」と云ふ様な天使が降魔の利劍を抜き持つて居つて、如斯き資格を持つて居る者の外は決して入る事を許さないのでありませう。

然し如斯く企業の小なる私有が段々になくなる事は、確かに是は空想でないと思ふ、それが來る事が理想であります、吾等の密接なる關係を有する蠶絲業經營でも、此處に來らなければならぬと思ひます。

「マルクス」の學説には種々の批難すべき點があるのでありませう、其儘では直に全部を信じ得ないでせう、然し「マルクス」が最後の理想を現はした『分業の下に於ける奴隸的隸屬がなくなり、従つて又精神勞働及肉體的勞働の對立がなくなつた後、勞働は生活の爲の單なる手段でなく、却つてそれ自身が一つの生活要求になつた後、個人の全面的發展と共に、生産力又増加し、共同の富の一切の源が十分に流れ出された後初めて狹隘なる有産的法律的地平線は全く通り抜けて仕舞つて、社會は其旗印の上に、各人は其能力に應じて、各人は其慾望に應じてと云ふ事を書き得る事となる。』

是は「マルクス」の最後の思想だらうと思ひます、私はこゝに來るだらうと思ひます、斯う云ふ社會が出て來るだらうと思ひます。

但し斯る新社會は「マルクス」の様に共產の社會でなくても出來得る事を信じます、社會がさうなると云ふと、社會は一つの家庭と同じ様の事となります。

我々の家庭では、生産力のない病人は、それ藥、それ滋養物と勞はり傳いて一番大切にします、小供も發育する爲に大切に於て教育をします、社會には何故斯う云ふことが出來ないのでせう。

是は今出來ない譯があります、其故は各人が中途半端の仕事をやつて居る、これは餘り働けない、大した仕事は出來ない様の組織になつて居ります。

然るに全面的の活動を各人が出來る様になると、富が増進する、富が多ければ總ての要求に應じて與へられると云ふことが、或程度まで出來るだらうと思ひます、斯くて社會が、一個の楽しい處となり、此世ながらの天國が出來、最大多數の最大幸福に代ふるに、社會全員の各分に應じたる至福至幸が得らるゝ事と信じます。

私は「カール・マルクス」にばかり例を採りましたから、或はお叱りを蒙るかも知れませんが、茲に極めて古い所から例をとります、そう云ふ人の誤解を解きます爲に、

私は孟子を愛讀いたします、孟子の梁惠王章句下に次の様の事があります。

『齊宣王問曰、文王之囿方七十里有堵、孟子對曰、於傳有之、曰、若是其大乎、曰、民猶以爲小也、曰、寡人之囿方四十里、民猶以爲大何也、曰、文王之囿方七十里、芻蕘者往焉、雉兔者往焉、與民同之、民以爲小不亦宜乎、臣始至於境、問國之大禁、然後敢入、臣聞郊關之內有囿方四十里、殺其麋鹿者、如殺人之罪、則是

方四十里爲阱於國中民以爲大不亦宜乎」

方百里以て王たる可しと云ふ地に方七十里の圍を持つて居る文王は民に怨まれる處が反つて圍が小さ過ぎると云はれ方四十里だけの圍を持つ宣王の民は之を以て大なりとする其要は何處にありますか民と之を同うする文王誤ては民を殺す宣王此處が天地尙壤も雷らざる差を來たした點であります。

民と之を同じうせよそこに初めて天地が開けるそこに王様たる途が開けると申して居ります孟子は實にうまい事を言つて居るではありませんか。

僅七十釜の製絲工場でもよろしい養蠶家と其樂を同うし其憂を同じうすると養蠶家以て小なりとなすのは必定であります此處が蠶絲經營の眞隨であります。

昔武田信玄が諸國の英雄を評論した中に「上杉謙信の弓矢は強大にして和なし織田信長の弓矢は大佞なれば後必ず變あらんと云ひ松平藏人の弓矢は——是は徳川家康でありますが——張り込めて冥加甚だねがへり生命長ければ天下の覇者たらむ」と云つたそつであります。

私は英雄は英雄を知ると思ふ如何に千釜二千釜の工場を建てゝも強大なる資本の増加だけでは其經營が困難となる様な時代が来るましてや弓矢が大佞である事即ち點欺謀計を行ふとせば如何に大きな工場であつても没落するより他に途はありません。

張り込めて即ち準備を充分に整へて孟子の「民と同じうす」と云ふ様に冥加甚だ願へる處の經

營をなすならば、私は茲に於て初めて事業が活用すると思ふのであります。

子貢政を問ふ、子曰く、食足り、兵足り、民之を信す、製絲工業の經營では、食と云へば原料繭に例へませう、之が十分にあり、生産の設備が整うて養蠶家も之を信じて、製絲業者と一身同體となつて進む、茲に亦爲政の大道があります。

太陽が東に出で、西に没落する如く、或時代の或目的が達せられて來れば、其次の時代が展開して來なければならぬことは判り切つたことであります。

そこに乗り移るやうな制度をうまく考へて置くことが、是が本當に爲政者の考ふべきことであり、そこに乗り移るやうな仕事をやる事業であつたならば、養蠶業者と雖ども、製絲業者と雖ども、本當に宜しきを得た點である。

鬭争は鬭争の爲の鬭争ぢやない、此資本主義經濟ばかりみて、それにのみ没頭せんとするものは時代逆行である、資本主義經濟も今言つた様に、伸び得る點があると云ふことを信じて居りますが、私は來るべき組織を今から用意するものでなくてはなりません。

「吾世に來れる道を直ぐせんが爲なり」と云ふ事は、何も豫言者の信念のみではありません、吾人が其覺悟で理想境の出現を待ち望む處に人生があるのであります。

甚だ抽象的なことばかり申しまして、中には不埒なことを言つたかも知れませんが、私は當然そうなる様な考から言つたのであります、私は「マルクス」をどこまでも信ずる者ではないが、「マル

クスに率ゐられてこゝまで來たのであります。

「マルクス」に手を引いて貰つてお話をした。是は「マルクス」の信用の出来る範圍内の事を言つたので是以上は申してはいけないし、又其必要がありません。

どうもしとろもどろのことを申しましたが、其點は健康状態から來たのでありますから、どうかお許を願ひます。

謹んで御靜聽を謝します。

(拍手)